

クリスティナ・ウニエホフスカ

Krystyna Uniechowska "Płyty"

「レコード」

翻訳
岩田美保

ノラ・シュチェパンスカ

Nora Szczepańska "Kucharki"

「女料理人」

翻訳
スプリスガルト友美

「女性であること。戯曲集」

Rodzaju żeńskiego. Antologia dramatu

アガタ・ハウプニク『女性形のもの』

はじめに

“シェイクスピアの妹”という人物像は、ヴァージニア・ウルフが1929年に執筆したエッセイ『自分だけの部屋』の中で最もよく挙げられる疑問点の一つであるが、今なお不穏な力を保つ作品だ。『灯台へ』を執筆したこの女流作家が、女性作品の強み、その特質、相違点について考察しつつ、他方、何よりもその社会的な条件について思いを巡らせながら、なぜシェイクスピアの妹がいなかったのかと問う。つまり、シェイクスピアのような偉大な作家を意味し、同様の力、気質、勢いを持ち、文学史や演劇史への影響を与えるような女流作家がなぜいなかったのか、と。シェイクスピアのような才能を持った女性はいまだ生まれなかったのだろうか。それは分からない。だが例え生まれていたとしても、この仮のシェイクスピアの妹は、シェイクスピアの時代では自分の才能を開花させるチャンスがなかったのではないだろうか。ヴァージニア・ウルフは「きっと気が狂うか、ピストルで自殺するか、どこか村外れの一軒家で、半ば男の魔法使いと恐れられ、嘲られて、生涯を終えたであろうということですよ¹」と述べている。ウルフの考えでは、「自分自身のそれに逆らう本能によっても非常に苦しめられ、引き裂かれるでしょうから、ついには必ず体をこわし、正気ではなくなるに違いない」といえる障害に出くわしていたことだろう。なぜなら、ある娘が「ロンドンまで歩いて行って、楽屋口に佇み、役者兼座元に強引に会ってもらおうとすれば、きまって我と我が身を害なうことに」なったからではないだろうか。さらに、「十六世紀のロンドンで自由に生きることは、詩人であり劇作家であった女性にとって、命取りになっても当然なほどの神経の緊張とジレンマを意味したことでしょう。その緊張とジレンマを乗り越え

¹Virginia Woolf, *Własny pokój* (アグニエシュカ・グラフ (Agnieszka Graff) 訳)(ワルシャワ: Sic!, 1996), pp. 68 (ヴァージニア・ウルフコレクション『自分だけの部屋』川本静子訳、みすず書房、1999年、pp. 74)

たとしても、彼女の書いたものは何であれ、緊張した病的な想像力から生まれる以上、ねじれた、いびつなものであったでしょう²

とも述べている。

シェイクスピアやキーツの仮の妹のこのようなジレンマと緊張、男性の批評を伴った感情的な争いについて書きながら、ヴァージニア・ウルフはそこに自分自身を重ねて書いている。この二十世紀の作家は、十六世紀に生きた彼女の先駆者たちが経験したのと比べても少なくはない緊張と争ってきたのである。ウルフのエッセイから、皮肉、苦々しいユーモアのセンス、それに彼女のナラティブな才能がすっかり認められた別の場面を取り上げよう。ウルフが図書館への入館を許可されなかったオックスブリッジ訪問の話だ。あのウルフが！同世代の中では最も才能ある女流作家に含まれ、意識の流れ手法の共同発案者であり、近代小説における変革の共同著者でもあるウルフが！

この時、私は図書館に通じる入口に現に立っていたのでした。私はドアを開けたに違いありません、というのは、すぐさま、白い翼ならぬ黒いガウンをはためかせて行く手を阻む守護天使のように、銀髪の優しげな紳士が咎めるような気配で出てきて、手振りが出ていくように合図しながら、残念ながら御婦人方は学寮の特別研究員と同伴か、もしくは紹介状持参の場合にのみ入館を許可される、と低い声で言ったのでした。（中略）神々しく静かに〔図書館は：引用者注〕、数々の秘蔵物をふところの中にしっかりとしまいでんで、それは満足気にまどろみ、かつ、私に関する限り、そうして永遠に眠っているでしょう。もうけっしてあのような反響を惹き起こすようなことはするまい、二度とあのようなもてなしを求めるようなことはするまい、と私は怒って階段を降りながら心に誓ったのです³。

ここで女流作家の“沸き起こる怒り”は注目に値する。この感情こそが数十年後、フェミニズム批評やジェンダー・スタディーズによって提唱された正典の見直し、そしてその形成のメカニズム誕生へと導いていったのである。だがまた

²前掲書、pp. 69〔日本語版前掲書、pp.75〕

³前掲書、pp. 24〔日本語版前掲書、pp. 10-11〕

、「アカデミー」と“文学”という空間から女性を排除することがどのようなことかというのを示すより、適切な比喻を考えるのは難しい。似たような屈辱は、その数十年前にマリア・コモルニツカ (Maria Komornicka) も経験していた。女流モダニズム作家という役割と関連する緊張に対して示した彼女の反応は、ジェンダー・トランスグレーションであった⁴。ヴァージニア・ウルフは自殺した。どちらの解決法も、世紀の変わり目を生きた物書きをする女性、かの“屋根裏の狂女”というイメージには特徴的に思われる⁵。

しかし、ヴァージニア・ウルフはさらに他の手がかり、彼女の考えによれば、女性的な作品（そして歴史上における“シェイクスピアの妹”の不在）を条件づけるものを示唆している。すなわち、テーマやジャンルの階級付けがあること

⁴1894年の終わりから1895年の初めにかけてケンブリッジのニューナム女子学寮に在学した、マリア・コモルニツカ (Maria Komornicka) の回想は注目に値する。彼女の体験は1896年に出版された『若者の楽園 — ケンブリッジの思い出 (*Raj młodości. Wspomnienia z Cambridge*)』の中で記されているが、面白いことにこれはヴァージニア・ウルフの考察と共鳴している。そのことから、マリア・コモルニツカについてはマリア・ヤニヨン (Maria Janion) が、続いてこの“若きポーランド”詩人についての著書を書いたイザベラ・フィリピャク (Izabela Filipiak) が、『若者の楽園』と『自分だけの部屋』を並べて論じるに至ったのである。参照：マリア・ヤニヨン『マリア・コモルニツカ追悼 (*Maria Komornicka in memoriam*)』〔マリア・ヤニヨン『女性と他社精神 (*Kobiety i duch inności*)』に所収) (ワルシャワ：Sic!, 1997); イザベラ・フィリピャク『非類似性の領域 — マリア・コモルニツカについてのこと (*Obszary odmienności. Rzecz o Marii Komornickiej*)』(グダンスク：słowo/obraz terytoria, 2006)

⁵“屋根裏の狂女”という人物像については Sandra M. Gilbert, Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-century Literacy Imaginagition* (New Haven : Yale University Press, 1979) (サンドラ・ギルバート、スーザン・グーバー『屋根裏の狂女— ブロンテと共に』山田晴子、藺田美和子訳、朝日出版社、1986年) を参照。ギルバートとグーバーの著書についての広範な論評についてはクリスティナ・クウォシンスカ (Krystyna Kłosińska) 『文学的フェミニズム評論 (*Feministyczna krytyka literacka*)』(カトヴィツェ：Wydawnictwo Uniwersytetu Śląskiego, 2010) を参照。

、女性的な文学の伝統が欠如していること、そして『自分だけの部屋』の著者が（このことを強調しておきたいのは、この点が彼女の文章において今日最も議論の余地があるように思われるからである）、創作には欠かせない条件だと考える経済的自立の問題である。

「なぜ“シェイクスピアの妹”がいなかったのか」とヴァージニア・ウルフが1920年代の終わりに考えあぐねていたように、リンダ・ノックリンは1971年に「なぜ女性の大芸術家は現れなかったのか？」と問うた。このように「単純な問いですら、もし適切な答えが得られるなら、一種の連鎖反応を起こすだろう」とフェミニズム美術史の母であり創始者は記している。

「なぜ女性の大芸術家は現れないのか？」という問いは、思い違いと誤解の氷山の十分の一、ほんの一角にすぎない。その下には、芸術の本質と状況によるその付随事情についての、人間の諸能力一般の本質と、特に人間の卓越性の本質についての、そしてこれらすべてにおいて社会秩序が果たす役割についての、あてにならない《世間一般に受け容れられた考え方》という黒々とした巨大なかたまりがあるのだ。《女性問題》それ自体が似而非問題かもしれない一方で、「なぜ女性の大芸術家は現れないのか？」という問いに包含される誤解は、女性の服従に含まれる特に政治的・思想的論点を越えた、知的困惑という主要な領域を指し示す。この問いかけの根底には、大芸術を作り出すことについてと同時に芸術一般の制作についての、単純素朴で曲解された無批判の前提が数多くある⁶。

ヴァージニア・ウルフとリンダ・ノックリンによる問いかけも、その回答形式も驚くほど似ている。アメリカの美術評論家ノックリンは、機関として条件がつけられていたことと美術教育から女性を排除していたこと（アカデミックな

⁶Linda Nochlin, *Dlaczego nie było wielkich kobiet artystek* (なぜ女性の大芸術家はいなかったのか) (バルバラ・リマノフスカ (Barbara Limanowska) 訳) in *OŚKA. Pismo Ośrodka Informacji Środowisk Kobiety* (女性環境情報施設誌), 1999年第3号, pp. 52 [リンダ・ノックリン「なぜ女性の大芸術家は現れないのか?」松岡和子訳、『美術手帖』1976年5月号に所収、pp.55]

教育モデルにおいて条件がつけられていたのは、ヌードモデルのデッサンであり、慣習的に女性には禁じられていた) について指摘しているが、問題の位置そのものに根を下ろしている方法論的な誤りでもあった。“女性の大芸術家”・“男性の大芸術家”に関する問いは、これまでの美術史のナレーションにおいて記されてきた暗黙の了解を受け入れていることが前提とされている。その鍵となる人物像といえば“天才芸術家”で、それはもちろん男性を意味していた。それと同時に、私たちは正典の仮定を覆さず、そこから排除された女性芸術家、すなわちシェイクスピアやラファエロの妹たちを探しながら正典をただ単に広げようとしているのである。

その一方で、女性フェミニズム研究者にとっての最重要課題は、フェミニズム演劇研究で知られる研究者ゲイル・オースティンに見られるような、歴史文学的、歴史演劇的⁷あるいは歴史文化的と同じように歴史芸術的なナレーションの再構築、“正典の爆破”であろう。オースティンは、フェミニズム批評の進展を示しつつ、それを三段階に分類している。最初の段階は、正典と正典のテキストにおける女性像の再解釈、第二段階は、正典から排除された女性芸術家像についての正典の拡大。第三段階は、この多作な研究者の最大の課題であるその“正典の爆破”は、劇場における意義創造のメカニズムを理解させる理論的な道

⁷類似の仮説を立てたのは、1980年代から1990年代にかけて、自身のビクトリア朝舞台での役者経験を書いた、イギリスの女性演劇研究者トレイシー・C・デイヴィスである。「イギリスの劇場での演技の歴史に関するこれまでの論文は、何よりもロンドンの舞台、どちらかといえば認可された劇場と関係のある優れた役者、主に男性役者の人物像に焦点を当てたものだった。そのため研究者は、田舎の劇場やエンターテインメントのジャンルと関係する男性役者および舞台で働く女性のあまり成功したとはいえない伝記とキャリアに条件付けされた、おびただしい数の社会的、経済的、慣習的詳細を見逃してきた」と書いている。「そのため歴史研究者は、これまで彼らが見逃してきたものを見るために、自身のレンズのズームを合わせ直すべきである」とデイヴィスは述べている。参照：Tracy C. Davies, *Actresses as Working Women. Their social identity in Victorian culture* (New York – London : Routledge, 1991)

具の探求によるだろう⁸。

そのフェミニズム演劇研究潮流の生みの親といえる本、スー＝エレン・ケースの1988年の著書『Feminism and theatre⁹』が、実際のところオースティンによって指摘された全三段階に当てはめることができるだろう。ケースは演劇史を女性の、正しく言えば女性の不在、欠如、排除という観点から言及している。何世紀にもわたる長い間、女流作家同様、女性役者として舞台上に女性は存在していなかった。唯一、男性役者によって演じられる男性の空想としてだけ存在していたのである。一方、古代ギリシャでは演劇の研究所化は、男性上位の研究所化と重なっていた（ケースはオレスティアにおける絵画にそれを見て取っている）。そこからこの手段の保守的な規模に関する疑問を投げかけることになる。“status quo”（現状）を証明する道具なのか、それともまた解放の道具となりうる破壊的な潜在力も持ち合わせているのか。演劇における女性の伝統を定めることさえしなくとも、その伝統に女性の長と名付けてもおかしくはない演劇における女性先駆者たちのことも記している。例えばテレンティウスの喜劇を脚色したザクセン州の尼僧ガンダースハイムのロスヴィータ、十七世紀に生きたメキシコの修道女ソル・フアナ＝イネス・デ・ラ・クルス、演劇のために書き続けた最初の女性のうちの一人として奔放な人生を歩んだことで知られているアフラ・ベーン、そして男装をすることが性に合い、その半生を男性として過ごし、また女性役者として男装の役を演じる女性のために書かれたいわゆる“breeches roles”（すなわち“ズボンを履いた”役柄）で成功を収めたスザンナ・セントリーヴァを挙げている。最後に、記号論とマテリアリスト・フェミニズム（物質的

⁸参照：Gayle Austin, *Feminist theories for dramatic criticism* (Ann Arbor : University of Michigan Press, 1990) (ゲイル・オースティン『フェミニズムと演劇 その理論と実践』堀真理子・原恵理子訳、明石書店、1996年)

⁹参照：Sue-Ellen Case, *Feminism and theatre* (New York : Methuen, 1988)

フェミニズム) に言及しながら、ケースは演劇における意義発祥のメカニズムについて考え、フェミニズム演劇を様々な規模で証明する。ケースの著書については、どんな方法を取るにしても多くを批判することができるに違いない(歴史を簡素化している、テーゼに根拠がない、例えば独りよがりなところが見られる)が、マニフェストとして今もなおパワー、エネルギー、新鮮さを保っている。

こんなにも長く女性を排除してきた男性上位で男性継承の伝統に対して、フェミニズム研究者、読者、実践者として私たちは、どのように自分たちの居場所を見つけるべきかというのだろうか。それに反して、演劇界に蔓延する権力と生産条件の関係を理解させてくれる道具を探す手段として、また演劇と男性上位との危険な関係を発見するために、そして“last but not least”代替可能な伝統と正典から排除された女性の登場人物や現象を探すために、スー＝エレン・ケースは古典のテキストを読むよう勧めている¹⁰。そんなケースの挑発からある程度インスピレーションを受けつつ、数年の私たちの仕事の成果を読者に届けたい。

本巻はHyPaTiaプロジェクトにおいて製作された。ポーランド劇場の歴史 (Historia Polskiego Teatru)

ヨアンナ・クラコフスカ監修の元、演劇研究所で行われたフェミニズム研究プロジェクトである。本プロジェクトの目的は、二十世紀においてポーランド演劇を共に作り上げた女性たち(女性役者、女性監督、女性脚本家、女性劇作家、女性教師)についての知識を深めることである。私たちの研究がポーランド演劇史についての知識を深めるだけではなく、研究者たち(女性も男性も)の認識の変化、トレイシー・C・デイヴィスが要求している、レンズの焦点を移

¹⁰前掲書、pp. 19

動させるということ、またその結果として、女性の観点と女性の経験を条件づける、歴史演劇的な新しいナレーションの創造、最後には、正典の拡大あるいは代替可能な正典創造へと導いてくれることを期待する。HyPaTiaプロジェクトでは、インターネットサイトwww.hypatia.plが立ち上げられ、ポーランド演劇における女性の歴史に関する記録資料が掲載されている。また、女性芸術家たちとの対話を記録した映像が随時制作されている¹¹。戦後ポーランドの舞台において、管理する立場にいる女性の存在や女性のテキスト、女性の演出に関する統計についても掲載されている。本巻と並行して統計集『アゴラ (Agora)』、プログラムの発言集『演劇の (非) 認識 ((Nie)świadomość teatru)』といった出版物が印刷中のほか、サイト上では『1944年～2015年における女性の演劇人生年代記 (Kobieca kronika życia teatralnego 1944 – 2015)』が掲載予定である。しかしながらやはり今回作り上げた戯曲集は、私たちにとっては特別な意味がある。

HyPaTiaが雑誌、記録書、Zaiks、国立国会図書館で探し出し、収集したものの中から大なり小なり（程度の差はあれ）知られた女性の手による戯曲作品¹²は、十九世紀末から二十世紀後半にかけて書かれたもので、本プロジェクトの女性メンバーが体系的に読み、まとめ上げたものである。私たちはそれら数十作品を共に読み、最終的に本巻に収録する十数作品を選び出すに至った。選ぶのは容易なことではなかった。私たちが議論した作品すべてが良質だったわけではない。既にヴァージニア・ウルフが懸念していたように、仮のシェイクスピアの妹が書いたものは「緊張した病的な想像力から生まれる以上、ねじれた、

¹¹HyPaTia のサイト上および YouTube と Vimeo における HyPaTia のチャンネルにも掲載されている。

¹²こちらも HyPaTia のサイト上で、テキスト、要旨、女性作家の略歴を掲載している。また、ポーナ電子図書館 (Biblioteka Cyfrowa Polona) の『HyPaTia-女性の手による戯曲 (HyPaTia – dramaty pisane przez kobiety)』という私たちのコレクションも参照されたい。

いびつなものであった」だろう。確かにそういうことはよくある。文章は均一ではなく、そこには女流作家の存在の欠如が見て取れる。伝えたいことは控えめであったりなんとなく書かれているだけであったりのようにもある。その一方で“根本的な”問いは、“良質な”というのはどういうことなのかということである。誰が、どのような美的基準によって評価しようというのか¹³。最良の（あるいは“最良の”かもしれないが）女性のテキストは（時には滑らかな形式の下に驚くようなメッセージが込められている、うまく縫い合わされたパヴリコフスカ＝ヤスノジェフスカ（Pawlikowska-Jasnorzewska）の戯曲のように¹⁴）、結局は歴史演劇的なナレーションの主流の欄外で機能している。しかしながら、私たちは新しい名前と題名を流れに乗せたかったのだ。私たちが考慮した続く基準は、テキストに込められたフェミニズム的なメッセージだった。「ポーランドは疑いもなくヨーロッパで特に豊富なフェミニズム戯曲で際立っていた¹⁵」と20年以上も前に書いたのは、ヤゴダ・ヘルニク＝スパリンスカ（Jagoda Hernik Spalińska）であった。その言葉は私たちにとって重要なインスピレーションを与えてくれ、本書のタイトルはそこから引用させて頂いた。とはいえ、フェミニズム基準はそれほど明白なものではない。今日の私たちにとっては彼女たちの作品の発言がフェミニズムであることが明白であるにもかかわらず、私たちが選んだ女性作家のグループの中で、自身をフェミニストと定義する者は多く

¹³フェミニズム批評は昔からその基準の独りよがりなところを熟考することに委ねている。演劇のフェミニズム研究については、ミメシスのカテゴリーを調査したエリン・ダイヤモンドの著書を挙げるのが良いだろう。Elin Diamond, *Unmaking Mimesis. Essays on feminism and theatre* (London-New York: Routledge, 1997) を参照されたい。

¹⁴参照：マリア・パヴリコフスカ＝ヤスノジェフスカ (Maria Pawlikowska-Jasnorzewska)、『戯曲 (*Dramaty*)』第1巻、第2巻、アンナ・ボレツカ (Anna Bolecka) 収集・監修 (Warszawa: Czytelnik, 1986)

¹⁵ヤゴダ・ヘルニク＝スパリンスカ (Jagoda Hernik Spalińska)、「女性形のもの (*Rodzaju żeńskiego*)」、『ダイアローグ (*Dialog*) 誌』、1996年第3号、pp. 150に所収。

はないだろう。それは自身の作品のページ上で男性上位の世界と闘うかのように、公的の場で同じく執拗に女性解放と闘い、女性活動に対して相反するガブリエラ・ザポルスカ (Gabriela Zapolska) の姿勢を思い出すだけで十分だ¹⁶。

従って私たちが最終的に選んだものは、妥協の結果である。知られていない、あるいはあまり知られていない女流作家の、知られていない作品を選ぶようにした。もちろんこれはガブリエラ・ザポルスカ (Gabriela Zapolska)、イレナ・クシヴィツカ (Irena Krzywicka)、マリア・クンツェヴィチョーヴァ (Maria Kuncewiczowa) についていうことはできない。正典の女流作家でありながら、クシヴィツカとクンツェヴィチョーヴァが戯曲を書いていたことは恐らく知られていない。『男性 (Mężczyzna)』は確かにザポルスカの作品の中で最も有名な作品に入るとは言えない (そしてそれがなぜかということを考えるべきだろう)。その一方で、私たちが選んだ3作品、マルツェリナ・グラボフスカ (Marcelina Grabowska) の『正義 (Sprawiedliwość)』、マリア・モロゾヴィッチュ＝シュチェプコフスカ (Maria Morozowicz-Szczepkowska) の『Aタイプ (Typ A)』、イダ・カミンスカ (Ida Kamińska) の『防空壕を埋めろ (Zasypać bunkry)』は、広く読者に行き渡る初めての機会を得た初の試みであった。私たちが選んだテキストの全てが優れているというわけではなく、恐らく全てが

¹⁶近年、この問題について余すところなく言及したのがマグダレナ・ガヴィン (Magdalena Gawin) である。参照：「女性解放に反対して (*Przeciw emancypacji kobiet*)」『第二のテキスト (*Teksty Drugie*) 誌』、2011年第4号に所収。またやはり、ここではザポルスカに捧げたヤン・チャプリンスキ (Jan Czapliński) の戯曲も参照されたい。チャプリンスキはザポルスカを社会演劇の女性パトロン、または女性の長とするのみならず、十九世紀から二十世紀への変り目の習慣の変化を体現した人物とした。参照：ヤン・チャプリンスキ (Jan Czapliński)、「スーパースター、ザポルスカ (すなわち、勝つためにどうやって負けるか) (*Zapolska Superstar (czyli jak przegrywać, żeby wygra*))」『ダイアローグ (*Dialog*) 誌』、2016年第7-8号に所収。

フェミニズム的なテキストとして解釈できるというわけでもない。しかしながら、その全ては何らかの理由で重要な作品であるとしたのだった。何らかの方法で、私たちや私たちが生きるこの世界と共鳴しあっている。今でも通じるところがある。

どの程度まで今でも通じるところがあるかということは、この2年が示している。この間、多くの分野で保守的なbacklash（跳ね返り）の印の元、私たちの国で流れていた2年間のことだ。全面的な中絶禁止や避妊薬入手の厳しい制限に対する闘いの場が続々と通りで繰り広げられ、恐らくはこの百年で初めて何千人ものポーランド女性がこのような闘いの場に参加した。『正義 (Sprawiedliwość)』の女性作者マルツェリナ・グラボフスカ (Marcelina Grabowska) は恐らく黒いプロテスト¹⁷の女性の長のうちの一人となり得たかもしれない。一方、本書のテキストの大部分が、ちょうど今世界的なメディアによって活動しているハッシュタグ“metoo”で記された改革と共鳴している。さらにその改革は、女性や女性に許された慣習に対して性的な背景を持つ暴力に関連しているのだ。いくつかの政治的兆候の浸透性、私たちに近い、女流作家た

¹⁷ここでは整理するために、長い議論の末、本書に加えないことにした二つの作品を挙げておかねばならないだろう。マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカ (Maria Pawlikowska-Jasnorzewska) の『アリ (Mrówki)』とマリア・クンツェヴィチヨーヴァ (Maria Kuncewiczowa) の『乙女の愛 (Miłość panińska)』である。これらの戯曲の女主人公たちは身ごもるが、様々な理由からまだ準備ができていない。出産を決めておきながら (あるいは出産しないことを決めておきながら)、何よりも自分のことを考えている。自身の健康、幸福、自立性の必要、そして墮胎に関する今日のポーランドの風潮からは完全に排除されている価値のことを。もちろん (彼女たちの“自立した主体としての”立場について、ということもできるが)、両親や夫の肩書き (職業) が決めることである。再生の権利についてのポーランドの議論を考えると、少なくともこの二作品について覚えておく価値がある。参照：マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカ (Maria Pawlikowska-Jasnorzewska) 『アリ (Mrówki)』、『戯曲 (Dramaty)』前掲第2巻に所収；マリア・クンツェヴィチヨーヴァ (Maria Kuncewiczowa) 『乙女の愛 (Miłość panińska)』、(ワルシャワ：Rój, 1932)

ちの左翼的な感受性、そして世界は良い方向に変えられるというその女流作家たちの期待についても記しておくに値するだろう。

本作品は、作家についての記述と解釈を提案した文章に始まる5つのブロックに分類されている。それぞれのタイトルは『解放』、『改革』、『沈黙』、『壊滅』、『再考』とした。恐らく他の様々な方法でも、私たちが推奨する意味の他の状況においてタイトルをつけることができるに違いない。それを是非考えてみて頂きたい。私たちが今回流通に載せた作品が、演劇史、戯曲史、ポーランド文化史について、また今日の社会的現実についての議論の手段になることを願っている。排除された女性と集団の状況がどのように変わるのか（あるいはどのように変わらないのか）ということについての議論。記憶、権力、政治、体、自由についての議論。正典の形について、そしてなぜシェイクスピアの妹がいなかったのかということについての議論。私たちが何を痛手とし、何を恐れ、どのような世界を求めて闘いたいのかということについての議論。戯曲が女性形にもなり得るのではないのかということについての議論。

アガタ・ハウプニク (Agata Chalupnik)

ノラ・シュチェパンスカ Nora Szczepańska

女料理人 Kucharki

全三幕

舞台の概要。女料理人たちは全て同一人物。

全三幕を通して舞台前面に厨房を設置。時代は飛ぶが、全三幕に登場する三人の女料理人は全て同一人物。舞台奥側の半分は、手前半分より高くなっており、古典的なアンティゴネー、ハムレット、ゴドーを演じる役者のためのものとなる。そこでこれらの演劇の一部が演じられる。

第一幕 アンティゴネー

舞台前面：厨房、左手には女料理人の寝台、右手には調理台、パン焼き窯、パン生地の入ったこね桶など。舞台後方にはほとんど何もない。柱の一部と他にあるとすればカーテン。幕が上がると、舞台前面の照明が落とされ、照明はアンティゴネーに当てられる。合唱隊（コロス）が立つ。アンティゴネー入場。落ち着かない様子。そわそわしながら黙って待っている。右手奥をのぞき込む。間をおいてそこからイスメーネーが登場。

アンティゴネー¹ お前は何か擱んでいますか、聞いていますか、それとも、
敵が繰り出す不幸が大事な人に迫るのに気づきませぬか？

イスメーネー には嬉しいことも辛いことも、アンティゴネー、
大事な人のことは何の話も届いてないわ。

二人の兄が一日のうちに相討ちで果て、
私たちから奪い去られてからというものは。

アンティゴネー そんなことだと思った。だからお前だけに
聞いてもらおうと、門の外へ呼び出したのです。

イスメーネー どうしたの。その話に心が乱れると、顔に書いてあるわ。

アンティゴネー

(絶えず湧き上がっていくほとんど喜びに近い興奮を感じながら

言う) クレオーンは兄上たちを、一人は手厚く
埋葬しながら、一人は埋葬もせず辱めているではないか。

噂では、エテオクレスの方は〈正義に則り〉、
しきたりどおり土に隠して、冥土の死者たちにも
受け入れられるようにしたのに、

無残な死を遂げたポリュネイケースの亡骸は、
も墓で覆ってはならぬ、もならぬ、

嘆かれずられもせぬまま、の鳥どもの
ご馳走にして、心ゆくまで貪りわせよと、
町の人たちに触れが出されたといひます。

こんなことを、あのご立派なクレオーンはお前と私に、
あろうことかこの私にも、警告しているそうなの。

それに、まだこのことを知らない人たちにはっきりと

布告するため、ここへやって来る、問題をやかに

考えていない証拠には、もし犯す者があれば、

で、民衆に石打で殺されることになっている、というのです。

1

老女登場前までのアンティゴネーとイスメーネーの会話の訳の出典は、ソポクレス (2014)
『アンティゴネー』(中務哲郎訳)岩波書店、pp.19-22による。

二人ともしばらくの間沈黙。奥の方から拍手の音が響き渡る。

イスメーネー まさか、あの人を葬るおつもり？国中に禁じられているのに。

アンティゴネー

（イスメーネーから離れながら。舞台が回転してもよい）そうよ、私の兄をね。それに嫌でもお前にも兄だ。（安堵したように笑う）

舞台前面の照明を女料理人たちへ。左手には薄闇の中に寝台。調理台の方から薄明かり。少女が、曲げた膝に頭をもたせかけて座っている。泣いている。老女が寝台の端で髪をとかしている。若くはないが、力強い女で、村落の賢い老婆のように、気高さと芯の強さを兼ね備えている。好色女は半裸で暖炉の脇に立っている。キトンの中にノミを探しては炎の中に投げ込んでいる。

老女

暑い……、あああ……、暑い。（あくびをする）あの子らに牛乳を地下室に持ってくよう言ったかね？

好色女

もちろんだよ！（あくびをし、体を搔く）ノミは活きのいい血のあるやつらを吸うっていうじゃないか。

老女 おお……、そらごらん。思い出したよ！

好色女

なんて大きいノミだろ！地獄に落ちろってんだ！（ノミを火に投げ込む）で、なんだい？

老女

いつだったか夢を見たんじゃ。王宮へ……、歩いて行ったんじゃよ……。（思いを巡らす）ああそうじゃ、王宮へ歩いて行ったんじゃ……。したら、あそこに……、井戸があって、そりゃあたくさんの肉があったんじゃ。さらに歩いて行くと、今度は壁中屋根まで肉がびっしり敷き詰めてあって、柱なんか……、そう、上から下まで肉が巻き付けてあったんじゃ……。

好色女 生肉だったのかい？

老女

そりゃあ真っ赤だったさ！階段をよじ昇って……、立ち止まり… …、振り返ってみりゃ……、岸部まで……、海まで……、へん……、その肉で赤く染ま

ってんだ！お天道様は黄色く、脂の塊のようで、そこら中を熱く照らしているんじゃない！

好色女 何だったんだい？

老女 どういうことじゃ？

好色女 牛肉だったとか？

老女

そうかもな。夢っていても、お天道様がカンカン照りで……。

そうさ、あんなに真っ赤で……、真っ赤っかで……。 (途切れ途切れに) 赤く……、赤く……、恐いくらいじゃ……。 (我に返って) そういや、ロースト肉は？地下室へ運んだかね？

好色女 もちろんさ。

老女

こう暑くちゃ、あちこち虫だらけじゃ。 (小声で) 考えるだけでぞっとするね！神様のご加護がありますよう……。

好色女

あっちにも転がって、腐ってるよ……、その上に鳥が……屋根裏から見えるよ！

老女 (少女を指して) 静かに……、いい加減にしておくれよ！

好色女 (小声で) おお、こわ……、おお、こわ……。

老女 あやつは昔から愚かじゃったな。

好色女

(小声で) 日没前には、あの鳥たちが鳴き叫んでいたね！あっちの虫けらの上を飛んでいたんだ！空中で旋回しながら獲物を狙っていたんだ！唸り声を上げて……。風はあっちの方から……。

老女 (さえぎって) 明日はパンを焼く日じゃ。

好色女 (ため息をついて) まだ手が痛むってのに……、ほら！

老女 生地が膨らんでいるか見てくれんかね！

好色女

デーメーテールのご加護を！ (手でその仕草をし、笑い出す) こりゃ、じいさんの腹みたいだ！

老女 ごらんよ！バカだね！

好色女

（考え込んだ様子で胸のあたりを搔き、一点を見つめる）考えて
みりゃ……、考えてみりゃ……、ずっと昔のことをさ……、まるで昔に戻って見てきた
みたいに……。何も見えないよ……。大きな黒い穴だ。それだけだ。時々その穴から何
かが飛び出すんだ。ネズミか……、池から飛び出たカエルみたいなのが！……それです
ぐに戻ってくるんだ。（くすくす笑う）

老女

はっきり言わせてもらおうがね、お前さんはウシより理性ってもん
がないようじゃね！

好色女

なんてことを！（間をおいて）だってあのじいさんの腹の話は、
あんたのせいだったんだからね！

老女

わしのせいじゃと？

好色女

……あんたのせいでじいさんが熱いワインに味をしめてしまった
んだよ。余計なお世話だったね。

老女

あんたが温めてやったんじゃろう、この恥知らずが！

好色女がくすくす笑う。

老女

おお！わしゃ、よく覚えているよ。はっきりとね！いつだったか
、やつが酔っぱらって寝ておったところを、テントに忍び込み、二本指でやつの上着を
つまみ上げ、そう、こうやって……、それからいつだって気になっていたあそこを見よ
うとのぞき込んだろう！

好色女

あそこには大きいものなんて何もなかったよ！（突然怒って）あ
んたはもう十分に見たんだろう、年寄りババア！

老女

だがあんたがじろじろ見たところは見ちゃいないよ！

好色女

老いぼれめ！ペッ、ペッ！

老女

こっちこそペッ！

二人ともしばらく沈黙。就寝。間。

老女 古い話じゃ……。

好色女

(シャツを入れ、ふてくされて) 今行くよ……。そのあんなのおしゃべりには余計だね。

二人は床に就く。少女のすすり泣きが聞こえる。好色女がため息をつく。少女がすすり泣く。

好色女

(大声でささやくように) あんなにハンサムな男をいじらせないなんてどうかしてるよ！

老女 シーッ……。余計に泣いちゃうじゃないか……。

好色女

(さっきと同じように) だが、やつらは休みなく殺してばかりと来たもんだ。呪われたラブダゴスの血だ！

老女

どの家系も呪われてるもんじゃ。しまいにはそろって死ぬんじゃからな。オイディプースとイオカステーのときのことを思い出してごらん！

好色女 (くすくす笑って) 息子がお母ちゃんとベッドで……。

老女

(あくびをする) 寝よう……。あの子もようやく寝るじゃろうよ。

少女は次第に大声ですすり泣く。

老女

(小声で) 考えるのも恐ろしいよ……。これでお天道様が照りつけ始めでもしたら……。

好色女

(小声で) もう随分と前から愛し合っていたからね。あの方は強くあの子を愛していたね。この目を見たんだ……。

老女 静かに……。

しばし沈黙。炎が消える。老女が突然跳ね起きる。

老女 クレオン様の香草！お前さん、すっかり忘れておったじゃろ！

好色女 うーん……。あの方は何の不幸もないんだろうね！

老女 便秘に苦しんでいるのはお前さんもよく知っておるじゃろ！

好色女
一度くらい待ってもいいだろう。どうせここに座っているのが好きなんだし。

老女 好きじゃな。連中はみんなここに来るのが好きなんじゃ。

好色女
それで腕から直接食っちゃ目の前に吐き出し、尻を搔くんだ。なぜだ？クレオン様はここに入った途端、すぐに単純な百姓のふりをする！

老女
“ふり”じゃない。やつらみんな“そうなって”座っとるんじゃ。王妃は？イスメーネーは？普通の女のように、やって来てはビールを飲み、キュウリの酢漬けをかじっとる。なんていうか、王宮ではいろいろ勝手が違って、嫌な顔をするんじゃ。あのアンティゴネーときたら！

好色女 おしゃべりすぎるね。

老女 あっちでおとなしくしとる分だけな。

好色女
あんたはそんなこと何にも分かつちやいない、という風にしゃべるんだ！

老女 誰がそんなの全部聞いている暇があるっていうんじゃ！

好色女
まだあの方が子どもの頃、何をしていたか覚えてるかい？男の子のふりをしてたんだよ！足の間にキトンをはさんで、弓で鴨を射っていたんだ！

老女
(炎に息を吹きかけ、鍋に香草を入れる) ああ、おかしな女じゃよ……。いつだったかやって来たとき、わしは手に包丁を握りしめておった。スイカを切っていたからな。するとその包丁に手を伸ばしたんじゃ。刺せ、といったんじゃ。怖れるでない、刺せ、強く、とな。なぜです？とわしは聞いたんじゃ。したら、耐えられるかどうか知りたいのです、というではないか。だから刺したんじゃ。一声も出さんかったよ。なぜ私は男ではなかったのです、戦にも行けたというのに、とだけ言うたんじ

や……。そして血がしたたり落ちるのを見ながら何かこういう風に笑ったんじゃないや……。

好色女 どういう風に？

老女

分からん……。すぐに煮詰まっちゃうよ。湯はまだ熱かったからな。

好色女 今日もここに来たとき、笑っていたな。

老女 それで？

好色女

葡萄酒をご所望だった。テーブルに着いてね。葡萄酒を見つめ、まるでそこに何か見えるように見つめていたんだ。で、飲まない。それから言うんだ。「誰にも頼らない……。誰にも頼らない……。どうしてあの人をあのままにしてこられたのでしょうか」と。それから「野良犬の死骸さながら道端に横たわっているなんて……」とかなんとか……。

老女 おお……。

少女 (顔を上げて) そうおっしゃったの？

好色女 それからまた笑ったんだ……。目は笑っていなかったがね。

少女

野良犬の死骸のように道端に横たわっているなんて…… (失望して)

老女 (寝台に歩み寄って) さあ、もうたくさんじゃ……。寝よう！

少女

……あそこに横たわり、一握りの土をかけて隠してくれる人もなく……。

老女 もうよい、もうよい……。

少女 ……あんなにも美しいお方だったのに……。

好色女 そうだね。それは本当だ。

少女

あんなにも美しく話されるお方だった。そして美しく行動され…
…、行動されたこと全て……。

好色女

はっきりさせておきたいんだけどね、これをあんたが横から客観的に見たら、笑いではち切れちまうだろうよ！

少女

やめて！（すすり泣く。聞）聞いても聞いても飽きなかった。時には理解できなかったし、時には自分で告白さえできないような私の考えそのものに感じることもあったけど……。そう感じたの……。 （胸を叩く）

好色女 そうだね、あの方はそう言っていたな……。その通りだ……。

少女

ある時、月がひどく明るく輝いていたことがあったわ。ポリュネイケース様は剣を携えておられた。私たちのそばの芝の上にその剣を置かれたの。剣は水のように光っていたわ。ポリュネイケース様は剣を見つめておっしゃったの。「これは死を歌うというおかしな豎琴の弦」と。死のことはよく話されていたわ……。

好色女 （気にかけて）あの方にはそういう予感がしていたのかい？

少女

「なぜ死のことなど話されるのです」と私は聞いたわ。するとあの方は「ああ、お前は戦いがどういうものか分かっていないな！」と。それからどうだったかしら？……あ、そう！……こうおっしゃったのよ。「恐怖に力、それと勝つかどうかも分からない、同時に必ず勝つということも分かっている……。剣の長さで測れば命は美しいものだ」そうおっしゃったのよ。

老女 ごちゃごちゃいうのはおよし！

少女

愛のことも話されていたわ……。 （泣きながら）ああ、辛いわ！

苦しいわ！ああ！

老女

婚礼か通夜の日に40人分の肉を焦がしちまったら、わしゃそれこそもっと辛い思いをするだろうよ！

好色女 ああ、そんな！

老女

いい加減もう寝とくれ。それに、夜中にめそめそするんじゃない

よ！

少女は静かに泣く。

老女

そうじゃなけりゃ、壺に水でもかけといで。訳の分からん心配事にはよく効くんじゃ。

また火が消える。料理人たちは眠りの床に就く。眠っている。少女が起き上がる。壺のところ近づくと、水差しを手取る。

少女

.....鳥たちがあの人の上に.....考えるのも怖いわ、考えるのも怖いわ.....。(火のそばを通り過ぎる。立ち止まる。水差しを床に置くと、炎を見ながら座り込む。小声で) あそこに横たわっている.....野良犬の死骸のように.....。(間)そして一握りの土をかけてあの人を隠してあげる者に災いが降りかかる.....。

暖炉の脇に置かれた十能で、無意識に灰を炎の上に撒く。突然立ち上がり、何か決心したかのように背筋を伸ばす。台所から駆け出す。もう一つの舞台に沿って奥の方へ駆けて行くのが見える。その間に、舞台上部には、アンティゴネーが登場。ゆっくりとした足取りで、舞台全体を歩き、降りてくると、少女と同じ方向へと向かっていく。

料理人たちの舞台では少しずつ明るくなる薄闇。誰かが暗闇で大きなあくびをする。大きな音を立てて何かが落ちる。誰かの大声が、半分ささやくように意味不明の言葉を発する。一日が始まる。料理人たちの舞台とアンティゴネーの舞台との間を番人が歩いていく。無言劇の変形であるこのモチーフは度々繰り返されることがある。一定の整ったリズムとして必要なものかもしれない？

老人合唱隊 (コロス) (アンティゴネーの舞台から)

天つ日の光の矢よ、
かつてなき美しき輝き、
七つの門のテーバイを照らして、
遂に現れたまう。
なす昼空のよ。
ディルケーの川面を照りわたり、
〈アルゴスのどもの、
白き楯かざし、総身をうを〉
鋭きもて、

ひた走る逃走へと追いやりたまう。²

女料理人たちの舞台に照明。料理人たちはパンをかまどにくべるのに忙しい。老女はパンを奥へ押し込み、好色女は手渡し、少女は走って持ってくる。

老女 (かまどを閉める)

運を天に任せようじゃないか！焼こうじゃないか！

願わくはそこから力を逃がさないよう！（前掛けで顔を拭く）

桶に残っているのをこそぎ取りな。こそぎ取ったものはニワトリにやりな。（はあはあとあえぐ）

それにしてもこんなにも丸めなけりゃいけないとは！はっきり言わせてもらうがね、お前さんは火のそばで何やらしておったしな！

好色女

何やらしておったって……。私だって仕事してたんだ。下女どもは家畜小屋にいたし、あの子は役に立たないし（少女を指さす）、今日はひどいおならみたいに誰かの後を追って離れないときたもんだ！灰なんて手ですくわなきゃならなかったんだよ。十能がどこかにいっちまったんだ。

老女 お前さんが自分でどこかに置いてきちまったんじゃろ。

好色女 昨晚は暖炉の脇にあったさ！よく覚えているよ！

老女

(少女に向かって) お前さんはどこかに持っていかなかったかね

？

少女は黙って、目を大きく見開いて見つめている。

老女

夜に何をしてたんじゃ？壺に水はないし、朝まで物乞いをしていたような面をしているし！

好色女がくすくす笑う。

老女 足を洗ってこい。真っ黒で、まるで母なる大地のようじゃ！

少女は立ちすくむ。

好色女 すっかりおかしくなっちゃったんじゃないかい！

老女

早く行くんじゃない.....。十能を見つけたら、元の場所に置いておけ

！

少女

(出ていきかけて、立ち止まる)ラッパが鳴っている。聞こ

える？

老女

日の出を告げるラッパじゃろ。

少女

誰も何も言わなかったの？

好色女

あんたが愚か者だって言っていたよ！（ヒヒッと笑う）

少女

(聞き耳を立てる) おお.....、また.....。

老女

誰かの足音のようだね。

養鶏商人が入ってくる。家禽がどっさり入ったかごを二つさげた奴隷を連れている。

商人

やあやあ、尻の大きなお嬢さん方！

老女

じいさん、何だって今日はこんなに遅いんじゃないね？

商人

森で迷っちゃまって。朝方の霧でね。運のいいことにこいつが（奴隷を指して）犬みたいに鼻が利くんで、道を見つけてくれたんでさ。それから.....。

老女

よかったじゃないか、理性はなくとも嗅覚だけはあってな！何か新しいことでも？（かごをのぞき込む）

好色女

(商人をさすって) 遅かったじゃない、オンドリさん。知ってるでしょ。あたしがいつも待ってること.....。

商人

(好色女を押しつけて)それから門のところにやあんな分かんず屋がいるときた！口のきけないやつあ口がきけないんだって言っても信じちゃあくれないんだ。それでずっと捕まっていたんでさ！

好色女

これだから番人ってのは！それで？

商人

いろいろ聞きまわっていたんで。今日町へ行く人はみんな捕まっていたんですけど。

老女 一体また何があったんじゃ？

商人

なんですと？何も知らないってんですか？この厨房じゃあ、まだ物事が起こる前からもうなんでもお見通しだつてのに？

老女 そう思うかい？

好色女 いいから、話しておくれよ！

商人 昨夜は犯罪が起こったんでさあ！

好色女 人殺しかい？！

老女が肩をすくめる。

商人

まったくの反対でさ。（声を低くして）死体が埋められたんでさ……。

好色女

ポリュネイケース様かい！やっぱりひどくあの腐臭を感じるやつがいたんだね！

老女 それはお前さんの話じゃろ！

好色女 （商人に向かって）話しておくれよ、どういうことか！

商人

あっしが何を知っているっていうんです。あいつらはあっしを捕まえると、あっしが昨晚どこにいたかって聞いたんでさあ。誰かれ構わず捕まえてたんで。連中、町中を歩き回ってまさあ……。

老女 つまりまだ犯人は捕まっていないってことかい……。

商人 ……それにしんとしている。警報を鳴らしていないんでさ。

老女 怖がっているんじゃよ。

好色女 怖がってる？

商人

連中の罪は、死体を埋めちまった犯人の罪と同じくらい大きいんでさあ。どっちにしる刑が待っているんでさ！

老女 特に犯人が逃げちまったっていうんじゃない。

商人

誰でも自分がかawaiiですからね。水をもらえませんか。葡萄酒のほうがもっといいですがね。のどがからからで、まるでおがくずのようなんでさあ。

好色女

ちょっと待っておくれよ……。 (注ぎながら) 冷たくて甘いよ。これはあの人に。 (2つ目のコップに注ぐ)

商人

あんなやつには葡萄酒なんてもったいない。どうせすぐにまたのどがかawaiiちまうんですから。

好色女 みんなそうだろ。

商人

やつののどがもう乾かないようにしたいんでさあ。そうすりゃやつだってもっと幸せになれるし、あっしだって出費が少なく済むってもんでさ！

老女 ああ、お前さんは賢いんだかひどいんだか！

好色女 (納得して) それでこそ男ってもんだよ！なんて男だ！

商人 もっとくれませんかね。

好色女

それで、どの番人に捕まったんだい？あの胸がパン2斤みたいに広く、背中に傷のある男かい？それとも浅黒くて……腰の細い男かい？肩幅はあんなにひろいのね！言っとくがね！……私を…… (どもる) そりゃ……もちろん冗談さ！……あんたのことは、オンドリさん、好きだよ。一番愛しているくらいだ。もう老いぼれオンドリだけだね。だがあんたは……まだまだ一つと言わずなんでもできるような人に見えるよ！

一同笑う。

商人

(真面目な顔つきになって、好色女の尻を叩く) 一つと言わず、一度とも言わずってね！

好色女 じゃあ何度？

商人 (まだ真面目な顔つきで) あんたのケツの価値の分さ!

老女 もう行っちまいな、この恥知らず!

好色女 私と一緒にしてくれるっての? ねえ言ってよ!

商人 結婚式をやろうってのかい?

好色女

あっちの高貴な方々の通夜か洗礼式か何かみたいだね! すぐに一回で全部済ませられるようなね!

商人

節約家だな! (飲む) 秩序は好きなんですなあ。秩序はなくてはならねえ。そんなに押しなさんな。それにきちんとしろってんだ!

好色女 (胸を叩きながら) 誓うよ!

商人 全部順番にな。あっしにはちと早すぎるな.....。

好色女と商人は自分たちのことで忙しい。

少女

ずっと思ってるんだけど.....。(聞き耳を立てる) ラッパの音?

違う?

老女 落ち着きな、お嬢さんよ!

少女 (小声で) 来るのかも.....。

老女 (同じく小声で) 十能はどこじゃ? え?

少女 あっち.....。置いてきてしまったの。

老女 やっぱりそうかい.....。

少女が泣く。

老女

よく考えてみりゃ、みんな起こるべくして起こったことで、こんなことが起こるのだって珍しくないからね! 何を考えとるんじゃ! さあ仕事じゃ! さっさとしろ!

少女 行くわ.....。

老女

オリーブ油を持っといで! 魚に取り掛かりな! 急いで! (好色女と商人に向かって) お前さんたちはここから出て行ってくれ! 鶏は空気を悪くするし、

羽があちこち舞い散るからね！とつとと鶏小屋にでも行っとくれ。一番脂の乗っている雌鶏と何羽か雄鶏も選んできとくれ。（好色女に向かって）全部は殺さないどくれよ。何羽か王様に残しとくんだ。王様にだって楽しんでもらいたいからね！

好色女 行ってくれるかい？私の素敵な人。

商人

（口のきけない奴隷に向かって）かごを集めろ！軽いんだ。あのただ飯食いがどんな面しているのか見てみろってんだ！

好色女、商人、口のきけない奴隷退場。

少女 聞こえる……？（手を止める）

老女 いいから、仕事を急げ！

少女

（老女の方へ寄って）あの人、私のことを見たの……。あの夜、あそこにいたのよ……。

老女 （手を止めて）誰のことを言っとるんじゃ？

少女 アンティゴネー様よ。全部見てらしたの……。

老女 アンティゴネー様だって？

少女

（聞）あの方はもう葬られていたの……。もう土の下にいたの……。アンティゴネー様は駆け寄ってきて、私を見たの。まるで私を殺そうとでもするかのように私に飛びかかってきたの。大体、ご自分でおっしゃっていたのに……昨日……あなたたちも聞いたでしょう……。

老女 ああ。ご自分でおっしゃっていたな……。

少女

あんな風に見るなんて……！あんな風に私を見るなんて！あんな目をして……。手を上げて……。それから手を降ろして振り返って……。行ってしまわれた。

老女 いつもおかしな女じゃったが……。それで？

少女

王様におっしゃるかもしれない……。もうおっしゃられたかもしれない……。

老女

いつだって自分で何がしたいのかも分からないような女じゃったからな……。 (聞) 何だってお前さんはそんなところへ首を突っ込んだんじゃ！自分がすべきことさえしてりゃいいのに！愚か者めが！ (かまどを開けて中を見る) 一番質の悪いのは……意味もなくしゃべってるやつで……何を考えているのか誰にもさっぱり分からないようなやつじゃな……。 いい具合に焼けてるね……ただかまどが少し熱すぎるかね……。 (パンを整えながら) この香りを感じるかい？パンの香りを……。

少女が泣きだす。

老女

……あの方は土、水、空気に火の力を持っているっていうじゃないかい。それでどうしたんだい？それからあの方を見たのかい？

少女 ……怖いの……。

舞台の反対側からゆっくりと威厳をもってクレオン入場。厨房へ入った瞬間から威厳をなくす。あくびをし、伸びをし、体をぼりぼり搔く。寝間着姿。家族のように料理人たちと挨拶を交わす。

クレオン 王妃はまだ眠っておる。いびきをかいてな……。

老女 もう自分だけで！

クレオン (テーブルについて) おお、よかった。わしのテーブルだ。

老女 もちろんですとも。誰も動かしやしませんもの！

クレオン

王宮とは違うんじゃない……。 あそこじゃしょっちゅう我らの王座を動かしよる！

老女 自分のしるしをおつけになっておくべきでは。

クレオン

赤い糸でしばりつけておったが、王妃がほどいてしまったのじゃ。(聞) 香草茶はできておるか？ 昨晚からどうもわしの体の下の方で何かが腐っておるようなんじゃ。 ああ……シー……。 (指を立て、耳を澄ます) いや、空耳だった。

老女 どうしたんです？何かをお待ちで？ (カップを差し出す)

クレオン (笑い出す) 待っているだと？ (香草茶を飲む)

老女 十分濃いですかね？

クレオーン

そうだな。(飲む) 胸やけがして、口の中に酸っぱい味が広がってくる。(口をくちやくちやくさせて) 苦いかもしれんな.....自分でもどんな味がよう分からん.....。

老女 きっと晚餐で脂っこいものをお食べになったんでしょう！

クレオーン その反対じゃ。ほとんど食べなかったのだ。

老女

それじゃあ、ご自身の不公平さがそなたさまを腐らせているのでしよう。

クレオーン

(胃に手を当てて) おお！げっぷが出おった.....。何を不公平などとくだらないことを言っておるのじゃ。

老女

だって死者を葬るのを禁じるなどと。しかもこんな暑いときに！あなたさまの命令はわしにや気に入りませんね！

クレオーン

(聞) 厳しい禁令だ。それは分かっておる。だが、そうでなければならぬのだ！

老女 不公平ですじゃ！

クレオーン

シー.....。(耳を澄ます) お主らはここでそんなことを.....。何か聞こえなかったか？

老女

そんなのは秩序とは言えません！わしらが何か腐っていくようなものを出しっぱなしにしておいたら、あなた様はなんとおっしゃる？

少女 (水差しを落とす) 来るわ！

クレオーン あやつは何を？

老女 好色女が鶏小屋から戻ってくると言っとるのです。

クレオーン 雌鶏.....(手振り)で.....何だと？

老女 何羽かそなたさまに残しておくよう言うときました。

クレオーン それはよかった！もっと香草茶をくれ。

老女 （注ぐ） どうです！

クレオーン お前はよく知らないことを話すのだけが好きなようじゃな！

老女 公平さのことならもちろんよく知ってますよ！

クレオーン 愚か者め！よく聞け、説明してやる……！

老女 何を説明なさるといいます？

クレオーン お前は歯が痛ければ、何をする？

老女 何をしますと？口に湿布をして温め、薬草で口をすすぎますよ。
。こうやって！

クレオーン ええ！……。じゃが、薬草が効かないほど痛かったら？

老女 したら祈ります。歯痛に効くような祈り文句があるんですじゃ。

クレオーン それさえも効かなかったら？

老女 待っとなります。粉々になっちまうまで……。どれも最後は必ず粉々になっちまいますからね。

クレオーン だが！待ちきれなかったらどうするんじゃ？

老女 どうして待ちきれないと思うんです？

クレオーン 話にならん！では話してやろう。歯が悪くなればだ、一本の歯が悪くなれば、他の歯も悪くしてしまうのじゃからよくなかろう。それで辛くなる。病に伏すことになる。そうなると大抵は鍛冶屋のところに行くんじゃよ。

老女 そうとも言いますね。でもわしは行きませんよ。

クレオーン じゃが他の者は行くのじゃ。少なくとも自分の健康を気遣うようなやつらはな。鍛冶屋がやっここで歯を抜き、それでおしまいじゃ。じゃがその前に本当にその歯なのか、別の歯ではないのか見極めねばならん。軽く木づちで叩くんじゃ。もし痛ければ……もう分かるじゃろう！

老女 分かりますが分かりませんね。

クレオーン わしの命令が不公平だと言うんじゃな！

きながら、そのハンカチの下からのぞき込む……。どうだ？面白いだろう！ただアンティゴネーは男のように強い。こういうときには目を伏せることはない。そういうところがわしは好きじゃないんじや。痛ましくなるんじや。女がそうするとき……。

老女

雌鶏が雄鶏のように鳴くときというのは、いいことがないって言いますからね！

クレオーン

(笑い出す) ……トキを上げる雌鶏、とな！(身振り) このようにか？

老女

(魚をさばいている少女に向かって) えらの下もちゃんと見るんじやよ。(クレオーンに向かって) おかしな子なんですよ……。

クレオーン

おかしなアンティゴネー……。だが、最近の若者は皆おかしい。あやつは加えて賢い。賢すぎるんじや。

老女

賢すぎる、というのはわしにとっては愚かだということと同じですがね！コショウが効きすぎたり、しょっぱすぎたり、酸っぱすぎるソースと同じでね。調味料のかけすぎ、などとは言わないでしょう。ただどうにもならん！愚かなソースめ！それだけですじゃ！

好色女入場。首の折れた鶏を数羽手に掴んでいる。

好色女 いらっしゃいまし、我が素晴らしい王よ！

老女

鶏小屋になんだってこんなに長く居座っていたんだい？商人はど
こだい？

好色女 行っちゃったよ。二日後にまた来るってさ。

老女 鶏の支払いを持っていかなかったよ！

好色女 前払い分をちょっとばかり持って行ったよ！

老女 ちょっとだって！

好色女

(少女に向かって) ほら、羽をむしってくれるかい。(クレオーンに向かって) 愛しのクレオーン様、あたしと鶏小屋に行きますか？

クレオーン (好色女をつねる) 鶏もまた弾力があるな.....。

老女 お行き。遊んでおいで。取り仕切るのが好きなんじやろ。

クレオーン (食べるのをやめずに) 好きじゃな.....。

好色女 あたしの愛しい人！

クレオーン

雌鶏が好きなんじや.....！ただただとても好きなんじや.....。あの黄色い目、赤く鮮やかなとさか。骨をしゃぶったらもう行こう。羽は柔らかく、輝いておる。それにあの首の動きといたら。

老女

もう時間ですじゃ！もう時間ですじゃ！王様、あなた様のせいで遅れたとしても、昼食をお待たせするわけにはいきませぬ。

クレオーン

まだこのかけらが.....。いつだってこのかけらが一番なんじや... ..。(口をぬぐって) もう済んだ。行こう。包丁はよく研がれておるか？

好色女 かみそりのようです。

クレオーン

鶏！わしが殺してしまう鶏でさえ好きでたまらんのじゃ！行こう、行こう.....。もしお前たちに聞こえたら.....、もし何かが起こったら.....、すぐにわしに知らせろ！あそこは何も聞こえんからな！

クレオーン、好色女と退場。もう一つの舞台からアンティゴネーが駆けてくる。厨房に飛び込む。

アンティゴネー 起こってしまったのです。あの者たちは王を探しているのです！

少女 起こってしまった.....。

アンティゴネー 急いで！急いで！もうあまり時間がないのですよ！

少女 逃げるのですか？

アンティゴネー

バカね！すぐにでもここに番人がやって来るのです。ほらもうそこまで.....。

あの方が言ったことは全部理解できたのです……、ただ理解できなかったのは……。

アンティゴネー

そうよ！……そうなのよ！……でもどう受け止めていいか分からなかったのでしょうか！まるで生きた心地がしないわ……。どちらにしてもそれはその人生ではないわね。……その本当の……、それはなんというか……。

少女 分かりますわ！誓って！

アンティゴネー 時々鏡をのぞいてみるのがあって？

少女 普段は水のはった桶をのぞいてみますわ。

アンティゴネー

鏡も水も嘘つきなのです！人の目をのぞき込んだとしても、その眼は嘘をついているのです！嘘つきなのです！鏡をのぞき込むように、人の目に映った自分を見てみるのです。そこに私が映っていると思って？ハイモーンの目に映るかわいらしい少女が、この群衆の大きく開かれた目に映る自己主張の強い王女が、またはあなたの方にとっては……。ああ、同じことね！ただ分かっているのは、自分にとって私が何者であるかということだけ！この一つが大事なのです！

少女 そんなに早く話されては……。

アンティゴネー

私は自分に疲れているのです。私の前にあるものに。最悪なのは、まだ私が疲れていないということ……。

少女 ……疲れなんてすぐに消えるわ……。

アンティゴネー

今がそういう時なのです。昨夜は寝つけませんでした。あなたと同じ。

少女 ……私と同じ……。

アンティゴネー

……心の奥底では自分自身のそういった人物像があるのです。その人物像は皆が、すなわちハイモーン、クレオン……、イスメーネー……がそうであれと命ずる人物とは全く違うのです。その人物像に偽りはありません……！それが私なのです！時々芝に寝転がり、あの井戸のように深く青い空を見上げると、敵との戦いを

繰り返すのを夢見るのです。神様、私はこんなにも力強いのです。こんなにも芯が強いのです！群衆を驚かせるほどに！正当なものになる歴史を変えるのです！夢の中でどれだけのことをしているというのでしょうか！（聞）時々私自身のことを笑ってしまうのです。（聞）でももう分かります！私は、出番の前に自分の歌を練習するオペラ歌手のようなもの！自分の役を繰り返す役者のようなものなのです！

少女

ポリュネイケース様のように話されるのですね。こんなにも美しく……。こんなにも理解しがたく……。

アンティゴネー

（圧倒するような様子で）今ならもう分かるのです！全てを捧げた英雄たちのことが！（聞）恐らくこれが全てなのです……。もし若ければ……。

少女

けれどハイモーン様は！ハイモーン様のことは愛していられないのですか？！

アンティゴネー

……人生がやっと始まったところなのです……。あらゆることが……。

少女

アンティゴネー様……。アンティゴネー様……。あの夜、私はあなたのことが怖かったのです……。あの場所で……。

アンティゴネー

（少女の話は聞かずに）昨日、私は決めたのです。クレオン様の祝福されたお触れ！あれは啓示だったのです！暗号だったのです！いつか既に同じことを体験したとさえ思われたのです……。夢の中で……。そしてそれは全て私の良心にかなっていた。

しばらくの間、お互いを見つめながら聞いている。

アンティゴネー

私はポリュネイケース兄様を葬りに駆けて行ったのです！荒々しい喜びに震えたのです！そうしたかったのです！私自身を欲したのです！生まれ変わった私を！新しい私を！何も私を邪魔するものはなかった！とうとう私自身になれたので

す！義務であり、妹としての愛であり、不公平に対する抵抗でもありました！

少女 おお……なんて恐ろしいお人……。

アンティゴネー

そうこうしている間に、全てはもう終わっていたのです。しかも誰の手で！お前は私のものを盗んだのです……。もっとひどいことには……私のすべきことを！

少女 なんてこと……なんてこと……。

アンティゴネー

私と同じような夢をお前が見るはずもなかろう！お前は愛ゆえに、または自分の考えへの嫌悪感から兄上を葬ることにしたのだ。違うか？私のすべきことを返しなさい！

少女 私はなにも知りません……。本当にそうだったのです……。

アンティゴネー

本当に！真実は変えることができるのです。ほかのあらゆるものと同じように創ることができるのです！

少女 でも私がやったのです……。

アンティゴネー

真実というのは人間の問題です。それ以外の何物でもないのです。人間がどう思うかというのが真実なのです！

少女 つまりどういうことなのです？嘘ということ……？

アンティゴネー

そうなのです！歴史は偽りの血で書き記しながら創られていくもの！そんなことも知らなかったのですか？偽り！偽りはミーノースの迷宮のように曲がりくねったものなのです！

少女 それは神々に背いているのではないのですか？

アンティゴネー

あらゆるものが神々に背いているのです。死の他は。けれど怖がるのはおよしなさい。死というそのひとつだけはいつの世にも手に入るものなのですから！

警報の音に混じって、近づいてくるラッパの音が聞こえる。アンティゴネーと少女が顔

を見合わせる。

少女 来るわ……。来るわ……。

アンティゴネー

(独り言) ……例えばまだ子どものような若武者たちは、荒々しい勢いで戦へと駆けて行きます。彼らを駆り立てる思いはただ一つ。最も大切な思い！その思いのために死ぬ準備ができています。列をなして……。しかし真実のために死んでいくのか、偽りのために死んでいくのかは知らないのです。

少女 アンティゴネー様、聞いていらっしゃるの？！

アンティゴネー

(少女の手を取って) 少女よ！歴史の流れを変えましょう！まだ起こる前に！ここ、この厨房で。あなたの行いは美しいわ。それをあなたから買い取りましょう。しかもよい値でね！

少女 私の代わりに死ぬというのですか？！

アンティゴネー

ああ、なんと偉大な言葉でしょう！そうでしょう？明日私は何になるのでしょうか？名もなき朽ち木になるのです！

もう一つの舞台でラッパと警報の音。登場人物が慌ただしく動き回り、騒ぐ声がする。番人が階段を下りてくる。

老女

(厨房に飛び込んで) 早く王様のところへ！番人がここに来るよ

！

少女とアンティゴネーは身じろぎもせず立っている。老女が走っていく。

老女 王様、あなた様をお探しですよ！正義のために！

番人入場。続けてクレオーンと好色女が入場。

クレオーン

(キトンで手を拭きながら、興奮した様子で) 何の用だ？早く申せ！

番人

(恐れおののいた様子で) 敬愛なる王様、ポリュネイケースの死体が葬られているのです。昨夜です。禁令が出ているというのに。

クレオーン

(おおそれはよかった、とでもいいかげんな様子で手を合わせる。

脅すように) 昨夜だと？城壁は見張っておったのか？犯人は？！

番人

逃げうせました。ただ死体を葬ったと思われる十能のみを置いて
いきました。

十能を見せる。一同見る。

好色女

なんてこった！あたしらの十能だよ！（不安げに周りの人たちを
見回す）あたしらの……十能。

しばしの沈黙。

クレオーン 何かの間違いであろう。よく見てみろ。お前たちもだ。皆だ！
料理人たちが順に近寄ってくる。

老女 わしらの……。

好色女 あたしらの……。

少女 私たちの……。

クレオーン

ここに誰かよそ者を入れたのか？思い出して見ろ。落ち着きのな
い目をした男とか？不審なやつとか？

女料理人たちは沈黙。首を振って否定する。

クレオーン それで？

沈黙。パン窯のほうから煙が出始める。

クレオーン

お前たちの誰でもよい！申せ！お前たちのうちの誰かが気が狂っ
たとでも申すのか？

老女がきょろきょろ周りを見回す。手を上げる。

老女 パンが焦げとります！お助けを！お願いします！

好色女

(その場から飛び跳ねながら) パンつかみを取りに行くよ！開け
ておくれ！

アンティゴネー その言葉通りですわ。私が兄上を葬りました。

クレオーン アンティゴネー！冗談を言うでない！

少女 (小声で) アンティゴネー様……。

アンティゴネーが少しの間少女を見つめる。

クレオーン お前はわしの息子の嫁になるのじゃ！よく考えろ！

アンティゴネー

もう考える時間などありません！もう起こってしまったんですもの……。

クレオーン

よく考えてみろ！（懇願するように）アンティゴネー、お前の言っておることは……。

アンティゴネー

（早口で）禁令に反してポリュネイケースを葬りました！禁令に反してポリュネイケースを葬りました！

クレオーン 嘘じゃ！

アンティゴネー （まぶたを押しして）真実です！真実です！真実です！

少しの間考え事でもしたかのように振り返り、動きを止める。それからもう一つの舞台の方へ向かって走っていく。階段を昇り、観客のほうに顔を向け、両手を上げる。

クレオーン 待て、アンティゴネー！何も言うな！そんなの何の意味もない！

アンティゴネー

（クレオーンの方には目を向けず、力強い声で）私がしたのです！私がしたのです！私がしたのです！

勝ち誇ったように立ち尽くす。暗闇が舞台を覆う。響き渡る銃声。

第二幕 ハムレット

台の上に葡萄酒の樽が置かれ、暖炉などがある典型的なルネサンス様式の厨房。奥には第二舞台、ハムレットの舞台がある。どちらかというと閑散とした舞台。身振り手振りで劇の一部を織りなす役者が常に動き回る、回り舞台としてもよい。厨房は舞台の残りの部分とは壁で仕切られている。壁の存在は状況に応じる。とにもかくにも壁には窓が

あることに変わりはない。窓際には、第二舞台に見入って立っている少女の姿。第二舞台の高くなっている部分を動き回るオフィーリアから目を離さない。

少女

（窓から離れ、ちらちらと何度も見ながら、オフィーリアの動きを真似て踊る。ささやくように）オフィーリア様はこうやって踊っていらっしゃる……。オフィーリア様はこうやって踊っていらっしゃる……。オフィーリア様はこうやって踊っていらっしゃる……。

オフィーリアが踊るのをやめる。肘掛け椅子のほうへと歩み寄ると、ひじ掛けにもたれかかる。少女は踊るのをやめる。オフィーリアの真似をして、いすのひじ掛けに手を置く。舞台右袖の前方で老女と好色女が下着をたたんでいる。足の交差したテーブル、長椅子、木の机。

老女

……絢緞子のテーブルクロスを10枚。晒のテーブルクロスを10枚。ブリュッセルレースのナプキンを12枚。（好色女に向かって）早く！こっちにおくれ！（小声で数え続ける）わしらの王様のご遺体に着せるシャツ。（十字を切る）主よ、永遠の安らぎをお与えください……。

好色女 今もいつも世々にいたるまで。アーメン！

老女

王様のご遺体のパンツ。一枚……、二枚……、三枚……、六枚……。威厳さえ感じられるほどにお尻でテカテカ輝いとる。

好色女

クローディアス王がそのパンツをはきたいかどうか。とても気難しいお方だからね。

老女 奥方様はクローディアス王のパンツをはかれているのにね！

好色女 確かに！しかも喜んで。

老女

次のをよこしな。（数える）王妃様のシャツ……。お年を召されると、より極上の飾りをお好みになるね！ごらんよ。このひだの数を！！

好色女

（シャツを自分の方に置きながら）おお……おおお……、まるで

花嫁衣装だ！新品同様だね。擦り切れているところもあるが。

老女

前の王様のところへ行かれるときは、日曜には3度か4度も同じシャツをお召しになっていたもんじゃよねえ。それが今じゃ毎週変えておられる。（シャツを明かりのところにわざと）ごらん！これは王様が亡くなられて10日後に洗い物のところへ放り込まれたシャツじゃよ。

好色女 美しいもんだ。絹だよ。前にはレースがついている。

老女

待て。こりゃ葬儀から2週間も経っておらんときのものじゃ。ハムレット様が毒を盛られたかのようにまだふらつかれていた頃のだ。

好色女 王妃様の寝室から召使が持ってきたんだ……。

老女

ああ……、昼食に干し梅のソースをかけた豚肉をお出した日じゃ！あのときはまだ王様は辛い調味料をお好みだった……。シャツは上から下まで裂けていたっけ。まるで誰かさんが待ちきれずに破いたかのようじゃった。

お互いの顔を見合わせる。

好色女

（くすくす笑って）そんなに我慢できなかったのはどなたさんですか？新しい王様、それとも王妃様？

老女

（じろっと見る。再び数える）……襟が10……、すべすべしたハンカチが10枚……、帽子が3つ、4つ、5つと。（大声で）それも旦那様の死後2週間ときたもんじゃ！まだ覚えているかい？風呂桶に入られてから、まだ日曜が4度も過ぎんうちにまたお風呂をご所望された！！

好色女 おきれい好きなことで！

老女

それでわしが何を言いたいかわかるかね？待て、まずはその布巾を置いてからじゃ！もし旦那様の死後2週間で奥様が沐浴されるということは、レースの付いた服が破れ、夜に葡萄酒を飲まれたということじゃ。枕がマルヴァジーア葡萄の汁でべだべだだったからね。あの老王にはあまり容赦してないと見えるね！

好色女 喜んでおられるくらいだ！

老女

もし今喜んでおられるとすりゃ、王様が生きておられた頃、王妃様は悲しんでおられたんじゃないか！

好色女

それじゃ王妃様が悲しんでおられたっていうことは、きっともうこれ以上悲しむのはやめにしたかったってことかい。

老女

そういうときゃ、礼儀ある旦那様はそれを分かって、横たわり、死ぬってもんじゃ。だからお望みの通り、このわしらの忠実なる王様は、奥方様を喜ばせるために亡くなられたというわけじゃ。

好色女 それに奥方様の愛人を喜ばせるために！

老女

それに奥方様の愛人を喜ばせるために！（聞）ちょっと変じゃな。（下着を数えて）始めっから変じゃったよ！

好色女 それで何を考えているんだい？

老女 人の秘密を抱えているもんだよ。一下着を数える者はね。

二人は下着をたたみ続ける。

好色女

これは霧吹きしなきゃならないね？このスカーフなんてからからに乾いてまるでおがくずのようだよ。レースはしわ伸ばし機で破れたのかね。

老女

少女に霧吹きするよう言っとくれ。わしらはたたんだら……。（少女に向かって）桶に水を入れて手伝いに来とくれ！あの子には全部言わなきゃならん。昨日生まれてきたんじゃないか！

好色女

（一枚のハンカチを注意深く見る）……しみが消えなかったね。

ごらんよ！

老女 何のしみだい？

好色女 ああ……、取れそうもない。織物が焦げてしまったみたいだ！

老女

(ハンカチを手に取って) そうさな。このハンカチは……、これは……。

好色女

どんな？

老女

黄色の絹で刺繍された王冠がついているやつじゃ。見たことがある。

少女

(近寄って来て老女の肩越しに覗き見る) ああ、これ！王様をお墓に葬られたときにご遺体の頭を拭かれたものだわ。

老女

聖ペロニカの奇跡じゃ！

好色女

またどんな奇跡だって？

老女

(もっと小さな声で) 聖ペロニカの奇跡じゃ。

好色女

(少女に向かって) 何のことか分かるかい？

老女

これは分かろうとすることなんか何もないんじゃ。さあ、仕事に戻ろう！

少女

……女性方が王様のご遺体を洗われていたとき、私に王様の頭を持っているよう言ったの。怖かったわ。頭は重く、冷たかったんですもの……。寒気が骨にまで染みたほど……。

好色女

なんてこった……。

少女

(老女に向かって) そのとき……王様の耳から、ハンカチに……。

老女

もういい、やめんか！

好色女

それで……。何だってんだい？

少女

王様の左耳から……このハンカチに……。

黙ってお互いの顔を見合わせる。

好色女

(小声で)王様の左耳から.....。左脇を下にして寝るのがお好きだったんだらう。耳が病気だったとか？

老女 大体毒蛇にかまれたという話じゃないか.....。

沈黙。そして再びお互いの顔を見合わせる。

老女

もうたくさんじゃ！このハンカチより面白いことがあるだらう。

オフィーリア様のシャツや館の女どものショーツじゃとか.....。

少女

(仕事を中断させ、少し間をおいて) ブッフィが死んだときのこと覚えてる？

好色女 主人の後を追ったんだったな.....。一晩中遠吠えしていたっけ。

少女

動こうともしなかったのよ。寝台の下に座って縮こまっていたの。かわいそうに同じ晩、早朝に死んでしまったわ。

好色女 王様がとてもかわいがっていたもんな。

少女

その夜のことで.....。ブッフィが.....寝台の下からはいずり出して、寝台に足をかけてご主人様の耳をなめていたのよ。

再びお互いの顔を見合わせる。老女は意味ありげに微笑む。好色女は口をあぐり開けたまま宙を見つめる。少女はしばらくして窓の方へ近寄ると、奥を動く人影を見つめる。

。

老女

(声を低くして、手を下着の山に置きながら) 全部本の中の出来事みたいじゃったね.....。

少女は少しの間振り返ると、再び窓を見つめる。

好色女

何をそんなにじっと見ているんだい？あっちじゃ何も起こっていやしないじゃないかい！

老女

あっちじゃ、何も起こっていやしない.....。(考え込んだ様子で)

) 王様が亡くなられてからというもの、あっちじゃ何も起こっていやしない……。

三人とも向こうの舞台の方を見つめる。

好色女 (驚いた様子で) なんてこった……、なんてこった……。

少女が窓から離れる。踊りのステップを踏みながら動くオフィーリアの姿が見える向こうの方をずっと見ながら、何歩か歩く。少女は踊り、オフィーリアを見る。

好色女

(顔を小突きながら) ……オフィーリア様がああして踊っている

とは……。

少女

(好色女のことは気にも留めず) ……オフィーリア様はこうして

踊っているの……。

老女

(変わらず考え込んだ様子で) ……あっちじゃ何も起こっていや

しない……。

好色女

それじゃああたしらは……。

老女

(考え込んだ様子で) ……森の中を歩いているとき、アリの巣の

そばを通るとするじゃろ。その中が見えるよう小枝を拾って塚に挿すのが好きじゃないかね……。

好色女

アリは……恐ろしく動き回るんだ……。

老女

(絶えずあちらの舞台のほうを見つめながら) あんまり恐ろしく

動くもんだから、目が離せないじゃろう！

好色女

アリは……動き回るんだ。

老女

(どちらでもいいといった様子で) アリでも人でも……。

好色女

アリは人みたいだ……。

老女

人がアリみたいなんじゃ。

少女

(踊るのをやめて) なんですか？

老女

人はアリみたいなんじゃ。棒で穴を掘って、のぞいて……。

少女

なんですか？

好色女 やつらの問題さ……。

老女

棒をアリの巣に突き刺したからといって、アリの問題に首を突っ込むなんて誰が言ったかね？！

好色女と少女は身じろぎもせずに老女を見つめている。

老女

(静かに) ……ただ小さな石ころが、小さな棒切れが、それであとは自分で動くんじゃ。

好色女 (何かを発見したように) 見ているだけというのかい！

少女 それで……どうなるの？

老女

怖がりなさんな！ (聞) さあ、仕事だ。一番大事なもんじゃからな。下着を持って！

少女はしばらくの間身じろぎもせずに立っている。だが、すぐにその眼は再びあちらの方へとさまよっていく。その舞台はひっきりなしに、とてもゆっくりと回っているが、ほとんど見えない (もしくはまさによく見えるともいえる)。そこでは戯曲の登場人物が動き回っている。

少女

(声を低くして) 王様よ。新しい王様よ。王妃の肩を抱いているわ。宴に行くのよ。オフィーリア様も一緒だわ。おお……、オフィーリア様。あの方が歩くとまるで踊っているよう……。王様は王妃様を愛していらっしゃるのね。オフィーリア様はハムレット様を。ハムレット様はオフィーリア様を。オフィーリア様はああして踊られるのね……。

好色女

(静かに数えて) ……14……、15……、ナプキンが5枚足りないじゃないか。あの泥棒洗濯女め！

老女

はっきり言わせてもらおうがね、今の時代、誰でも盗みを働くんじゃ。ほれ、高貴な方々高貴な方々じゃって、まったく公平とはいえんぞ。ただ十戒では挙げられないようなもんを盗んどるんじゃ。

好色女 ごらんよ！マーセラスが来る！

マーセラス登場。老女が仕事を中断してマーセラスを見る。

マーセラス

 お前たちのところは暖かいな！（大きなテーブルに腰掛ける）懐
の中のように暖かだぞ！

好色女 お前さんのところはきっと寒いんだろ！

マーセラス

 試してみるか！だがお前のところのほうが暖かいだろうな。正直
言って、赤ん坊になって胸にしゃぶりつきたいくらいだ！（好色女を自分の方へ引き寄
せる）

好色女 放して、この猛牛！

マーセラス 凍えてしまったんだ。城壁を守っていたのでね。

老女 （マーセラスから目を離さずに）亡霊が怖くないのかね？

マーセラス えええ……。

老女

 言っておるじゃないか。今じゃ毎日、いや毎晩といった方がよい
か……真夜中頃に……。

マーセラス 私には誰も何も言っちゃいないよ。

老女 お前さんには何も言わないんじゃ。

マーセラス どうして何も言わないんだ？

老女 皆怖がっているからじゃ！

好色女 （温めた葡萄酒を注ぎながら）ほら、飲みな。

老女 お飲みよ、アリさん。

マーセラス

 猛牛という者もあれば、アリという者もある。（笑って）猛牛…
…、アリ！（飲む）熱い！（飲む）うまい……。 （聞）皆何を怖がっておるのだ？

老女

 （好色女と少女に向かって）晚餐に取りかかる時間じゃ。食器を
持っといで。

マーセラス それで皆何を怖がっておるといふのだ？

老女

まずは下着をたたんどくれ……。そうそう。汚れないように全部
かごに入れとくれ！

好色女 おお！聖ベロニカのハンカチだ！（笑い出し、声を上げる）

マーセラス 無信心者の罰当たりが！

好色女

離しとくれ！いいから離しておくれよ！私を引き止めておくよう
な力がないなら、離しておくれ！

マーセラス それならその亡霊の話はどうしたのだ？

老女 お前さんに誰も何も言わなかったのじゃったら、明らかに……。

マーセラス お前には申したというのか？

老女

そんなに知りたいかい！言ったかもしれんし、何を言ったらよい
か分からなかったかもしれん。

マーセラス 嘘を申しておるのだろう！

老女 そうであればわしの罪じゃ。お前さんには関係ない！

マーセラス

だが、なぜそれを秘密にしておくのか知りたいのだ。しかも私の
前で！

老女

お前さんがおしゃべりなのと違うか？それか、信用されておらん
のじゃろ。

マーセラス お願いだ！

老女 熱いうちに飲んだら、もう行け！

好色女 （通りかかって）この小さいアリさん！

マーセラス

（老女の腕をつかんで）老女よ！申すまで離さんぞ！あやつらは
何を隠しておるのだ？

好色女

あんたらはみんなその時が来るまで隠しているだろ、アリさんよ

！

マーセラス さあ！言え！

老女 その亡霊のことを聞いてみな。

マーセラス 亡霊だって？

老女 あの現れたという……。あやつらが見たという……。

マーセラス どんな亡霊のことを言っておるのだ？

老女

(小声で) あんな秘密を心にしまっておくのは辛いぞ。あまつさえ、危険じゃ……。

マーセラス 早くしろ！

老女

(ざっと引き離し) その手を離しな！わしゃ言いたい時に言うのじゃ！

マーセラス 亡霊というなら……。では私は知りたいのだ！

老女

(料理人たちに向かって) 豚肉を持ってきたかね？マジョラン、干しぶどう、詰め物の刺し棒は？

好色女 レバーの詰め物かい？

老女

そうさ、レバーのさ。少女よ、それを葡萄酒に漬けてくれ。その上の棚にある白いのでね。

マーセラス ちょっと手を止めて私のところへ来い！

老女

焼き物は麦パンの団子で囲もう。卵を60個持ってきとくれ。好色女に、バター一さじと卵黄20個を混ぜるよう言っとくれ。

マーセラス その面殴ってくれよう。(立ち上がり) それではやってやる。

老女

……団子と焼き物の間には喉肉を置こう。誰か地下室に取りに行っておくれ。

少女

ソースは何で味付けするの？ハムレット様はクリームがお好きだ
けど……。

老女

ハムレット様……！料理人はまずは自分のために調理するもんだ
よ。それが良い料理人ってもんだ！

マーセラス もうよい。話にならん！

老女

マーセラスさんよ、こっちへ来なさい。この卵白を泡立てておく
れ。そうすりゃもう話すから。じゃが、秘密にすると誓うんじゃな！

マーセラス さあ早く！言え！誓うから！

老女

わしも多くは知らんのじゃがな……。耳を貸せ……。 (小声で言
う)

マーセラス おおお……。

老女 ……鎧に身を固めた……。

マーセラス 誰の亡霊だろうか？

老女

わしがそれを見たと言うのかね！真夜中に自分で行ってみればい
いんじゃ……

マーセラス おかしい、ひどくおかしいぞ……。

老女

じゃが誰にも何も……わしが……覚えておれ！約束したんじゃ…
…。

マーセラス 他に誰がその亡霊を見たのだ？

老女

これ以上はもう何も言わん。それでもお前さんはもう十分知りす
ぎとる。恐らくこれが危険だと言うことはお前さんも承知しておるじゃろ……。

マーセラス

それはお隠れになった王の……亡霊だと言うのか。 (十字を切る
。間) 私自身もう何度もそのことは考えていたが……。

老女

行きなされ！もう行きなされ！もう何も言わず、何も聞きな
さるな！

マーセラス

(出て行こうとしてやめる) おかしい.....同じ考えが頭の中から
離れない.....。

老女

(手を振る) 行きなされ.....いいからもう行きなされ.....。

マーセラスが出て行く。

好色女

これからどうなるんだろう？

少女

亡霊のことは？

好色女

亡霊のことだって？だいたいそんなものないんだ。あんたが自
分で考えたんだろう！

老女

怖がりなさんな！そんなこと願ったら亡霊を10も見ちまうわい！

少女

でも亡霊は何も言わないわ！

老女

言うじゃろ、言うじゃろ！あやつらは自分が思っておることを聞
いておるんじゃ。新しい王を陥れないよう大声で言うのをはばかりおるのじゃ！どっ
ちにしろ亡霊のせいになるんじゃ！亡霊を捕まえるんじゃ！

少女

でも亡霊なのよ！

老女

確かに！

少女

ハムレット様ご自身が！私におっしゃったのよ.....。

好色女

おっしゃった.....、おっしゃった.....。

少女

あっちへ行って！何も知らないくせに！

好色女

この目で見たんだよ！どんなにあんたを強く抱いていたか！

老女

やめないか！

好色女

.....ただ何をおっしゃったかは聞いていないんだ。

少女

あの方はオフィーリア様を愛していらっしゃるのよ.....。

好色女

でも隠れてあんたのことを抱いていたんだ.....。

少女

.....オフィーリア様を愛していらっしゃるのよ。

老女 (見下したように) オフィーリア様を!

少女

ハムレット様はあんなにも美しいお方……。それに美しいことをおっしゃることができるの。他の人がしたらおかしく見えることも、上品にこなされるのよ。

好色女 違う目で見たら、笑いで弾けちまうだろうよ!

少女

あの方の話はいつまでも聞いていられるわ。時には何を考えていらっしゃるのか分からなくなることもある。時には私の考えと同じなこともある。私が自分でも説明できないような考えと。あの方が私の心を見透かしているように感じるの。ある時は月が明るく輝いて……。

老女 卵黄はいくつ使ったかい?

好色女 運のいいことに数えておいたよ。15だ。

老女 あと4つ割っておくれ。

少女

昼間のように明るかった。芝の上で私たちの脇に剣を置かれたの。剣は水流のように輝いていたわ。私はその剣に口づけたの。そして言ったわ……。

老女 もっと強くすりな!

好色女がひっひっと笑う。

少女

……私は言ったのよ。オフィーリア様はハムレット様でもあるのですと。あの方の手は私の髪に触れていた。そしておっしゃったの。これは死を歌う奇妙な豎琴の弦、と。ああ、剣の長さで測る人生が良くないものであると同時に良いものでもあるということがあなたに分かったら……。

好色女 そんな測り方なんてくそくらえだ!

少女 オフィーリア様にも同じようにおっしゃっていると思う?

老女

気にすることはない。オフィーリア様のためにはもっと頑張っておるじゃろ! はっきり言わせてもらおうがね、それが男ってもんじゃ。

好色女

それじゃ、かまどに火をつけるよ……。少女よ、薪と火打金を取
っておくれ……。

照明がもう一つの舞台の方へ。ゆっくりと回転。町の城壁の上に舞台が見える。マーセ
ラスの姿が見える。他の人物もいる。バーナードとホレイショー。時間の経過を示すた
め、舞台は回転し続ける。再び城壁。舞台が移動。

マーセラス³ ホレイショーはわれわれの妄想だと言って、
てんで信じようとししないのだ。われわれが
二度までも見たあの恐ろしい姿のものを。

それで、たっってお願ひしてお越しいただいたわけだが、
今夜はわれわれと一緒にとくと見張ってもらい、
もう一度、あの妖怪が現れるようなら、

われわれの目の確かさを認めて、かやつに話しかけてもくれるだろうからな。

ホレイショー 馬鹿な、そんなもの出るものか。

バーナードー まあ、そう言わずに、しばし腰を落ち着けて。

われわれの話聞き入れようとししない、その閉じた耳の砦をもう一度攻撃して、聞かせ
てみせるから。

われわれは二晩つづけて見たのだ。

ホレイショー では、腰をおろして、

バーナードーの怪談でも聞くとするか。

バーナードー つい昨夜のこと、

北極星の西に見える、ほら、あの星が、

今も燃え輝いている大空のあの辺を照らそうと

さしかかって来たとき、マーセラスとわたしは、

折りしも鐘が一時を打ったそのときに—

マーセラス しっ、黙って。見ろ、あそこを、また現れた！

舞台が移動。何周か移動。料理人たち登場。

好色女 さあ、それで？

老女

下女らに樽を磨いて熱湯でパンこね台を煮沸するよう言っとくれ。それから見習いの少年の中から誰かにカプシチャシュ⁴を呼びに行かせておくれ。千切りにしてもらいたいんじゃ。

好色女

もうだいぶ前からここにいるよ。召使い部屋に口のきけないあの男と座っているよ。

老女

(作業をやめ、前掛けで顔を拭く) はっきり言わせてもらうがね、こんなにもたくさんの仕事と責任がわしらの手にかかるとるんじゃ。頭が割れちまうくらいじゃ！なんてたって、やれケーキを焼け、洗濯をしろ、召使いが盗みを働かないようにしろ、美味しく作れ、時間に間に合うように、綺麗に、体に良いものを……。キャベツはよく漬かったものを、キノコはよく塩味のきいたものを、ハムはよく燻製されたものを……。あやつらの中で誰がなんでも気に掛けると言うんじゃね？誰もそんなことせん！あやつらの頭の中は愚かなことばかり。戦、政治、陰謀に暴飲！公平なことなんて全く考えちゃいない！

好色女

ゲルトウルーダ、じゃなかった、王妃様と言いたかったんだ。王妃様は昨日ここにおいでになったよ。聞いておくれよ。あたしは笑い出したね。あたしは牛肉のローストに棒をさしていたところだったんだ。王妃様は近づいて来られて、匂いを嗅がれたんだ。まるで臭いとでも言うように鼻を曲げられた。言っておくけどね、肉は新鮮そのものだったんだ。なのに王妃様は、どんなお肉ですか？豚肉ですか？だとさ。

老女と少女は笑い出す。

好色女

豚肉だと！牛肉と豚肉の違いが分からないような愚か者を見たことがあるかい！

老女

簡単なものを見分けられないようなら、もっと大きなことでしょ
っちゅう間違えてばかりで、このわしらのデンマーク国家のことでうまくいなくても
驚くことはできないわな！

少女 ハムレット王子もそのようにおっしゃっているわ。

好色女

おっしゃってる.....おっしゃってる.....。(聞) 言っとくけどね
。あの人には亡霊が見えるんだよ。

老女

見ていなかったらそれこそ奇妙だね！じゃがそのことは置いてお
いて、公平な仕事に取り掛かろうじゃないか。こっちに千切りしてくれる男をよこしと
くれ。それに樽じゃ。

好色女

発酵キャベツ祭りだっていうなら、ばあさん、ケチケチせず、葡
萄酒樽ごとおくれよ。

老女

ああ、欲しくなったかい。他にまだ何が欲しいか分かるよ。あの
年寄りを誘惑したいんじゃないか？とうとうその気になってくれるんじゃないかねえ。

少女 結婚したいのにいつもうまくいかないものね.....。

好色女 あんたはうまくいっているって言うのかい、え？

少女 私はそんなこと考えてもいないわ。

好色女

そうかい？ごらんよ。しょっちゅう目が誰かさんを追っかけてん
じゃないか。目の端っこで.....。オフィーリア様.....。ハムレット様、ハムレット様...
...。オフィーリア様。ケッ.....。あのオフィーリアの馬鹿め！

少女

へん.....、馬鹿なカプシチャシュ！あんなシャボン玉みたいな頭
して！

老女 いい加減にしとくれ！

好色女

オフィーリアの後を追って地獄へ！ハムレットの後を追って寝台へ！余計なこと言うもんじゃないよ。きれいごとと言って、そんな赤い手をして……、かわいい指もしてるけどね。ばあさんに代わって運んでやりなよ！あのぺちゃぺちゃしてか細い手がもげちまうじゃないか！悪魔にそそのかされないようにね！

少女 あなたからこそその悪魔が出て行って欲しいわ、この役立たず！

好色女

お待ちよ。そんなだったらあんた、私の結婚式で大きなお腹をして踊ることになるよ。どうせみんな笑うんだけどね！

カプシチャシュ登場。続けて口のきけない男が千切り機を背負って登場。下女たちと見習いの少年たちが食器を運びながら入場。一人は空の樽を転がしてくる。オフィーリアが駆けこんでくる。

オフィーリア

(向こうの舞台から走ってくるのが見える) ……王様がお立ちになった……。王様がお立ちになった……。！(怯えた様子で) おお……、今度は何が起ころのでしょう。「明かりだ！明かりを持って！行くぞ！」と叫ばれたのです。

老女

おお……、おお……、なんて叫び声を！あそこで何が起きているというんじゃないね。話しとくれよ、お嬢様！

少女

おかけになって。こちらにおかけになって……。ゆったり座れるわ。(オフィーリアのほうを見て、しぐさをまねようとする)

オフィーリア

(優美な様子で) 芝居があったのです。都から役者がやって参りました。

好色女

誰かあたしらが耳も目も悪いと思うじゃないか！

オフィーリア

舞台ではゴンザーゴが演じられていました。

老女

どんなゴザだって？

少女

ゴンザーゴという名前よ。

老女

なんじゃと？名前が演じられるのかい？

好色女

どうしても全部理解しなきゃ気が済まないのかい？

少女

静かに。いい加減オフィーリア様の話を聞きましょうよ。オフィーリア様、あの人たちのことは気になさらないで。

老女

はっきり言わせてもらうがね、あやつの口をふさいでやりたいね

！

オフィーリア

ゴンザーゴは庭で毒を盛られたのです。長椅子に寝ころんでいたところを突然、男が小瓶を持って近づき、耳に毒を流し込んだのです。

老女

よい酵母では生地はきれいに発酵するでな。

オフィーリア

(優美に戻って) 何をおっしゃるのです？

老女

ただなんとなく。早う続きを！

オフィーリア

ハムレット様は私の隣りに座っていらしたのですが、「これは本当の話だ。さあ見てみろ。今度は、あの人殺しが王妃の愛を勝ち取るぞ」とおっしゃったのです。

好色女

王妃様ってどんな？

老女

わしらのじゃよ！ほかに誰がいるんじゃ！

オフィーリア

(見下すように) ばかなことを！王妃様、というのはこの本物ではないほうのことです。ゴンザーゴは王様で、妻がいたのです。お分かりになって？

老女

誰がそんな話考えたんじゃ？

オフィーリア

ハムレット様がその芝居を所望されたのです。そういう芸術なのです。

老女

たいそうな芸術だね。わしゃ、亡霊が考え出したのかと思ったよ

！

少女

オフィーリア様、続きを。

好色女

そりゃいいね！まったく！まるであたしらと下着を数えているよ
うだ！

オフィーリア

王様は「明かりを持て！」とお叫びになったのです。まるで化け物でも見たかのようにでした。王妃様は気を失ってしまいそうでした。皆が始めたのは...
...

カプシチャシュ 城じゃ、死んだ王様の亡霊が出るっていう話だ。

好色女

今頃何だい！もう何週間も前からその話で持ち切りじゃないか。

(カプシチャシュのほうへ寄って) お前さん、カフタンが擦り切れているじゃないか。

おお！こっちも！

カプシチャシュ 誰もかがってくれる人がいないもんでね。その手をどけろ！

口のきけない男 うええええ……。うえへえへええ……。

オフィーリア

寒気がしたように震えていますの。だって何もかもが……気にな
ってしまっ。

老女 葡萄酒を一杯お出しするよ。少女よ、葡萄酒を！

オフィーリア

人が大声を上げるのが好きではないのです。ただハムレット様だ
けが笑っていました。(聞) かわいそうに。

好色女 聞いたところによるとあの方は……(額を指さず)

少女

(グラスを差し出しながら、オフィーリアに向かって) 本当です
の……？本当に……？そんな意味もなく話されていたこと、私気がつかなかったもので
すから。

オフィーリア

(グラスを傾け飲み干す) 私に聞かないでちょうだい。何も知ら
ないのです。(口ずさむ) 素敵なコマドリ、かわいいコマドリ……。 (聞) ああなんて
こと！

口のきけない男 うええへへ……。

カプシチャシュ ここに置け、くそ野郎！

好色女

かわいい人、お願いしてくれたらこの穴全部かがってあげてもいいわよ。

オフィーリア こんなに深いグラスなのにもうからっぽだわ！（笑う）

口のきけない男 うえええ……、うええへへ……。

カプシチャシュ 失せろ、このくそ野郎！

老女

少女よ、お嬢様に葡萄酒をお注ぎ。（笑う）お飲み、アリンコさん、お飲み……。

好色女

アリが動き始めたよ。（カプシチャシュに向かって）それであたしらはどうなるんだい？え？

カプシチャシュ

（真面目な顔つきで）あっしはここにキャベツを切りに来たんです。（好色女のお尻をつねる）お前さんのお尻は固いね。それは認めるが。

好色女 聞いたかい、なんてぶしつけな男だろ。

口のきけない男 うえええ……、うえええ……。

老女

うえ、うえ、じゃないよ！千切り機を用意しな。キャベツを持ってきな。それ以外に脳はないんじゃないから！

カプシチャシュ

ああ、すまん、こりゃそんなに簡単なもんじゃないんでね！手に感覚と理解がなけりゃいかんのでね。キャベツというのは一つ一つ……。

老女

刑吏のヴィルヘルムと同じようなことを言うね。あやつも、どの首も同じように容易く切れるもんじゃないと言っとった。

好色女

（カプシチャシュに向かって）あんたの首はきっとすっぱり切れるね！

オフィーリア 葡萄酒が多すぎないこと？こんなに甘い葡萄酒……。 (笑う)

少女

(オフィーリアの真似をして) もっとお飲みになって？一緒に飲
みましょうよ……。 (注ぐ)

オフィーリア

(一気に飲み、笑う) 助けて！何かしたいのです！早く！急いで
！

老女

仕事しな！キャベツを運んで！千切りに！その女たち、塩の入
った袋を取りにいとくれ！

好色女 ばあさん、葡萄酒をおくれ。仕事が楽になるよ！

声 葡萄酒！……葡萄酒！……葡萄酒をおくれ！

老女

何？ここに樽があるじゃないか！カプシチャシュ、栓を抜いとく
れ！

オフィーリア あら！葡萄酒が足に跳ねたわ！

少女 ほら、たらいを置いて！

老女 仕事だ！

下女たち あと一口！

好色女 あと一口だけ！ゴックン！

口のきけない男が身振りでも自分も飲みたいと示す。

カプシチャシュ (真面目な顔で) 試してみて、考えるとするかな。

好色女 結婚式……、結婚式……。

オフィーリア 結婚式……、結婚式……。 (歌う)

イエス様へのこんな悲しみ

そこからどんな結果が生まれるか！

でも少年のせいにしてはならない

みな同じようにしたいのだから

好色女 (胸を撫でて) したい……！したい……！

オフィーリア (歌う)

皆変われるの。

あの方は結婚すると約束した。

私の愛しい人、結婚するよと。

でも君は焦りすぎたと……（泣く）

私のせいであの方は理性を失くされたと言います……。

老女

ええ、アリンコさん……、アリンコさん……。少女よ、葡萄酒を
あげとくれ！

少女

（オフィーリアにグラスを渡して）お飲みなさい、オフィーリア
様。お泣きなさい、オフィーリア様！

オフィーリア

（少女を見つめて）……皆が言うのです。あなたとハムレット様
が……。

少女

（再びオフィーリアに注ぎ、自分も飲みながら）お飲みなさい、
オフィーリア様……。

老女

仕事だよ、子どもたち！（大きな水差しから一気に飲んで）仕事
に……取り掛かれ！

カプシチャシュが切り、口のきけない男がキャベツを手渡す。

カプシチャシュ 誰が踏みつけるんだ！好色女、お前の重さで足りるな！

老女 樽のところへ行きな！

カプシチャシュ 足はきれいか？

好色女

（靴を脱ぎながら）誰がそんなこと気にするもんか！だいたい裸
足で歩いているわけじゃないんだからね！

カプシチャシュ （好色女を樽に載せて）ほら！飛び跳ねろ！

好色女が笑いで唸るような声を上げる。キャベツを踏みつける。皆笑い、大声を上げ、
飲む。

好色女 (歌う)

女が男を揺さぶった。

しなの木の枝の上で！

揺すって眠らせることはできなかった。

なぜって彼はひどく尻をこいていたから！（歌い、リズムに合わせて踏みつける）

私を揺すってくれ、ばあさんよ、

豆の入った椀をやるから！

私はあんたを揺すらないよ

じいさんや……。

オフィーリア 踊りましょう！踊りましょう！（踊る）

少女はオフィーリアを見つめ、真似するように踊る。

好色女 オフィーリア様、樽へ！オフィーリア様、樽へ！

一同笑い声をあげる。

口のきけない男 うえええ……、うううえええ……、あああ。

老女 オフィーリア様を入れな！やらせてみな！

カプシチャシュ お嬢様をこちらへ！

オフィーリア

樽へ！樽へ！（踊りながら靴を脱ぐ）オフィーリア、熱いわ……

。少女よ、手をつかんで！（カフタンを脱ぎ捨てる）

カプシチャシュ

（オフィーリアを樽の中に入れると、好色女が床へ飛び出す）ほ

うら、お嬢様！

オフィーリア あら、なんて高いのかしら！

好色女 ドレスの裾を上げて！キャベツは濡れているよ！

オフィーリア ああ、裾ね！暑いわ！（ドレスのボタンをはずし、脱ぐ）

全員 ドレスなんてあっちへぼい！仕事は仕事だ！

少女

（オフィーリアにならって服を脱ぎ捨て、シャツで踊る）ああ、

なんて高いの！なんて高いの！

見習いの少年 オフィーリア様、シャツが汚れます！

好色女 オフィーリア様！ねえ！それをお脱ぎなさいよ！

オフィーリア

暑いわ！暑いわ！暑いわ！（キャベツを踏みつけ、笑いがこみ上げる）

全員 （歌う）

女が男を揺さぶった。

しなの木の枝の上で！

揺すって眠らせることはできなかった。

なぜって彼はひどく……くさかったから！

次第に速く、次第に激しく歌い、くるくる回り、足を踏み鳴らし、暴れまわっていく。

全員 女が男を……揺さぶった……。

しなの木の……枝の上で……。

揺さぶった……揺さぶった……。

揺さぶった……揺さぶった……。

揺さぶった……。

リズムを強調するようにテーブルや食器を叩く。熱狂的なジャズが生まれるほどに。オフィーリアは踊っている。飛び跳ね、熱に浮かされたように既にすべてを脱ぎ捨てていた。オフィーリアは一糸まとわず、ほどかれた明るい髪で覆われた部分だけが隠されていた。突然遠くからサイレンの音の人々の叫び声の中に入り込む。皆黙り、身じろぎせず固まっている。ひどい人の叫び声が繰り返される。料理人たちの舞台では、皆身じろぎもせず立っている。もう一つの舞台から、綴織の壁掛けを引きずりながらハムレットが降りてくる。手にはむき出しの剣が握られている。厨房に入る。

ハムレット

（壁づたいに苦しい息遣いをしている。料理人たちに向かって）
これを持って行ってくれ。しみを取って、破けているところをかがらねばならん。剣のほうは……。

少女 そんなにもひどい叫び声だったのでしょうか？

ハムレット

（樽の中で裸になっているオフィーリアに気がついて）オフィーリア……、オフィーリア……。

オフィーリア

(怯えた様子で) これは葡萄酒の……、お許してください、王子様

……。

ハムレット

君が私のことを許してくれ、オフィーリア……。だが、これは、このことは、君は許してはくれまい！

オフィーリア

(次第に更に怯えた様子で) 私は裸なのです……。なんてこと！

私は裸なのです！

ハムレット

(手を差し伸べ、樽から出るのを手伝って) いや、オフィーリア……。君は喪に服しているのだ。

オフィーリア 喪に服すですって？何をおっしゃいますの、王子様！

ハムレット

殺したのだ。私の母上の部屋で、綴織の壁掛けの向こうに隠れていたのは誰だっと思われるか？私はそれがクローディアス王だと確信していたんだ！誓って言うが、クローディアス王だと思っていたのだ……。父上の死に報いて欲しかったのだ。それはきっと誰でも分かってくれるだろう！誰でも！君も、オフィーリア！
オフィーリアが叫び声をあげる。

ハムレット

だがそれは君のお父上だったのだ……。殺したくはなかった……。オフィーリア！誓って言うよ！

オフィーリアは叫び声をあげ、怯えた目で見つめる。

少女

オフィーリア様、ハムレット様は殺すおつもりではなかったのです……。

オフィーリアは叫び声をあげ、手を上げたまま裸でもう一つの舞台の方へと逃げていく。足がもつれて倒れ、逃げる。

好色女

(老女を見て) なんてこった！なんてこった！

老女

だから言ったろう。あの方はおかしいって。

好色女 犯罪だ！恐ろしい犯罪だ！

ハムレット 王を殺し、その弟と結婚するよりは
恐らくむごいことではないだろう！

口のきけない男がばかげたように笑っている。

カプシチャシュ

静かにしろ、くそ野郎！（老女に向かって、声を低くして）キャ
ベツはどうするんだ？

老女

どうするだって？自分のやるべきことをおやり。そうしろと言わ
れたんだから、やるんだね！

カプシチャシュ （口のきけない男に向かって）仕事だ、くそ野郎！

口のきけない男は口ごもりながら歌をまねようとする。

少女 静かに……、静かにして。見えないの？王子様がここで……。

ハムレット ほえておればよい。酒をくれ！

少女 はい、ただいま！

ハムレット 歌わせておけ……。

カプシチャシュ

まったく歌になつとらんな……。これじゃみじめなしゃがれ声だ
……。だがもし王子様がお望みなら、あっしが歌いますぜ。

好色女 葬送曲かい？

老女 黙れ、愚か者め、王子様を傷つけるんじゃないよ！

ハムレット 葬送の歌でもよい。大変明るいメロディでな。

少女 お飲みなさい、ハムレット様……。お飲みなさい。

ハムレット

（コップを持ち上げて）オフィーリアを呼べ……。 （飲む）いや
、だめだ。葡萄酒をもっとくれ！

少女 はい、ハムレット様……。

ハムレット いや、やはりオフィーリアを呼べ。

少女

（窓の方へ近づき、もう一つの舞台の階段のところはまだ見えて

いるオフィーリアを覗き見る。小さな声で) オフィーリア様……。 (振り返り、ハムレットを見る。もっと小さな声で) オフィーリア様。

ハムレット 酒だ！

少女

(まだ窓のそばでオフィーリアの動きから目を離さない。ささやくように) オフィーリア様……。 オフィーリア様……。 オフィーリア様……。 オフィーリア様……。

カプシチャシュ (声を低くして)

……しなの木の枝の上で

揺すって眠らせることはできなかった。

口のきけない男が怒って、樽の中へ飛び込んだ！

好色女

(老女に向かって小さな声で) あんたは怖くないのかい？ なんてったって人を殺したんだよ。

老女

何を言うのかね。(肩をすくめて) そうはいつでも人間だろ。それに、頭のおかしい男のやったことだ。

好色女 アリが……アリの巣が……、と言ったろう。

少女

(蹠って移動しながら) ……アリ、……アリンコ……、アリさん、怖がらないで……、雌鶏さん……、ねぐらに座っている……、見ている……、座っている……、待っている……、誰かが近づいてくる……、誰かが……。

好色女 黙れ、頭のおかしなやつめ！

老女

だったらなんだっていうんじゃ！ (カプシチャシュに向かって) キャベツはまだたくさんあるかね？ 包丁はよく研がれているかい？

少女

(蹠って) よく研がれた包丁、キャベツの頭……、頭……、十分に研がれた包丁……、それとも……。

老女

静かに！ばかげたことを言うのはおやめ！ふざけるのもいい加減

におし！仕事だよ！

少女 ……頭を切り落とすわ！それ！

老女 歌いな！みんな歌いな！

全員 女が男を揺さぶった……。 (小聲で自信なさげに歌う)

ハムレット (少女に向かって) オフィーリア……。

少女 (ハムレットの回りを踊る) 私は……、私は……。

ハムレット もっと近くへ！

少女 ……オフィーリア様はこうして踊るの……。

老女 少女よ、わたらのほうへ来い！

少女

(大声で意識をはっきりとさせて) もう行くわ！(踊るのをやめ

ずに小さな声でハムレットに向かって) ……オフィーリア様はこうして踊るの……。

老女 少女よ！

少女 王子様が放してくれないの！

ハムレット 来い！

少女

(ハムレットの膝の上で) あの方を愛していらっしゃるの？おっ

しゃって……。

ハムレット もっと近くへ、オフィーリア！もっと近くへ！

少女 もっと強く……。

ハムレット (目を閉じたまま)

許してくれるかい……？君はいい人だって分かっていたんだ。こういうやり方でも。

少女 (ハムレットに口づける) 目をお開けになって……。

ハムレット (目を閉じたまま)

こうしていると君はいい人だ……、

君はこうしていると……。

少女

目をお開けになって、少しの間で結構ですから。少しの間だけでも私のことをごらんになって……。

二人は愛情をたっぷりこめてキスをし、愛撫する。

老女 足元のこのいまわしいじゅうたんめ！

好色女

少女にやらせりゃいいさ。扉の向こうの水差しの中に灰汁があるよ！もういい加減におしよ。少女、聞いているのかい！

老女

ハムレット様、もう少し葡萄酒をお飲みなされ。ただ今度はお水と一緒に。おお、そうです。ハムレット様、もうその子を離してください。

少女 もう目を開けてしまわれたのなら……。

老女

冷たい水でしみを洗い取っておくれ。まだ血がすっかり乾かないうちにね。さあ、その子を離してください。もしお前様の罪の跡を洗い流してしまいたいのであれば。

ハムレット それは容易いことだ……。

老女

(少女に向かって) それじゃ、まずは冷たい水に浸しな。それから灰汁を加えてブラシで気をつけながら血の跡をこすっとくれ。

ハムレット これは容易いことだ、本当に！

老女

よくお聞き！それからぬるま湯ですすぎ、塩を一握り加えるんだよ。

好色女 ……それに酢を！

老女 ……それに酢じゃ。こうすればしみはすっかり消える。

ハムレット ……ただ消えるというわけか！

老女

もちろんじゃ！すっかり消えるんじゃ。そして少女がかがってくれりゃ、はっきり言って、わしのハムレット様、全ては元通り。誰もそこに穴が開いていたなんて思ったりはしませんのじゃ。

ハムレット

……誰もそこに穴が開いていたなんて思わない……。全ては元通

り！何も変わらないのだな。きれいに洗われて、かがられて、ブラシがかけられて、全て終われば。これでいいんだな？

老女 この世ではそういうものでございますじゃ。

ハムレット 素晴らしい。お前はあらゆることによい助言をしてくれるのか？

老女 合理的なことであれば何でも。

ハムレット

.....それでかがったり、洗ったりできない問題は.....ないということ
を信じておるのか？

老女

なんてばかげたことを！問題は洗えませぬ。洗えるのは物だけです！

ハムレット

お前にとっては、型から外れたら、それはただのパン生地だ。酵母を入れすぎたパン生地だ。私が言いたいのはこの世のことだ.....！

老女

いつだって酵母はちょうどいいくらいに入れなければなりません。型も適したものを。パン生地がすっかり入るような大きいものを。一度こぼれたらもうどうすることもできませんのでね.....。また初めからやり直しですじゃ。

ハムレット しかし私が言っているのはこの世のことなのだ！

老女

分かりませぬ。この世とは、偉大な言葉で、それを直すにはやはり偉大な力が必要ですな。ところで亡霊のことはどうなったのですか、ハムレット様？

ハムレット 誰が亡霊のことを言っておるのだ？

老女 みんなです。

ハムレット

皆.....。（聞）それより食事を出してくれ。その問題は洗ってかがれば済むようなものではないからな！

老女 でもちょうどそこから出てきたものですがね！

ハムレット お前が何を知っておるというのだ！もっとワインを！

老女 わしらのところではそういうもんですじゃ！

ハムレット

いつも全て万全だというのか？お前は何も心配してはいないのか？

老女 それには時間が必要ですじゃ。

ハムレット 例えば、死と先ほどのことについて考えたことはないのか？

老女 先ほどのこととは？

カプシチャシュ

口をはさんですんませんがね。王子様がおっしゃるのは、そのあらゆる恐ろしい考えのことではないですかね？死ぬことを考えたり、……煉獄や永遠の罰のことを考えたりするときに頭に浮かぶような？

ハムレット その通りだ！ここに座れ。老女よ、葡萄酒をもっとくれ！

カプシチャシュ 酒は考えごとの薬にもなりまさあ。

ハムレット 飲むのだ。それで？

老女

もうおやめなされ……。そういう考えがわしの頭に浮かぶとき、わしは主の祈りを唱え、何か別のことを考えるのですじゃ。

カプシチャシュ (自分の方へビンを引き寄せ) そんな一度に！

老女 一度にではない……。順番にじゃ。昼食、パン作り、洗濯！

ハムレット 悪の力に対する楯のようにその陰に隠れているのだな！

カプシチャシュ

(ビンの後ろに隠れて。真面目な顔で) あっしはそうしていまさあ！そうでしょう、王子様。人が自分の周りに少しばかりそういった本物の、大事なものを集めると、すぐに楽しくなるというものでしょう！その後ろに座って、のんびり飲んで食べる。それこそ人間的なことで、どうしたら危険を感じないとか、どうしたらあなことを簡単に忘れられるかとか、みんながそういうことを経験しているんじゃないでしょうかね……。

老女

働いているか食べているやつは、悪いことなんて考えている暇はないんじゃよ！

ハムレット それならばやはり、楯のようなものだな。

カプシチャシュ

秩序、それも忘れさせてくれませあ。秩序。(飲む)でもあそこには何があるってんです……、あそこには？

好色女 おやまあ、どこの何を見ているのさ？

老女 父と子と聖霊のみ名によって！おやめよ！

ハムレット その通りだ……。この建物には何か永遠のものがあるようだ。

老女 何をしてなさる？

ハムレット

みんな潰れて、腐って、壊れてゆく……。しかしここは違う。潰れたものはすぐに捨てられる。腐った肉のように包丁でそぎ取ってしまう。

老女

本題に入られましたな。腐ったところはそぎ取って、残りは水ですすいで、塩を振りかけ、香草で香りづけして、手と包丁を洗って……。清潔でなければなりません。床にしみなど問答無用。鶏からむしった羽一枚ありません。血の跡も…

…。

口のきけない男がぶつぶつ口ごもる。

カプシチャシュ おお……、亡霊だ……。

老女 神様！！

全員が右手の扉の方を覗き見る。扉は開いていて、何か暗いものにくるまれた人影が降りてくる階段が見える。

好色女 ポローニアスの亡霊だ！

人影は次第に下の方へ降りてきて、くるまっていた綴織の壁掛けをゆっくりと開いていく。

好色女 少女！

老女 はっきり言わせてもらおうがね、そりゃあの少女じゃないか！

口のきけない男は笑ってぶつぶつ口ごもる。

好色女 (少女に向かって) おい、バカ娘！私らを脅かして！

少女

(誰も見えていないかのようにさらに移動する。ゆっくりとおかしな動きをする。オフィーリアがしたのと似た動き) オフィーリア様の心が乱れてしま

(老女に向かって) おい！こりゃみんないいか、悪いかしらんが、このキャベツはどうするんですか？

老女 このキャベツがどうしたんだい？

カプシチャシュ 秩序は大事でさあ。なのに時間はどんどん過ぎていく。

老女 そうさな。はっきり言わせてもらうがね、わしもそう思うよ。

カプシチャシュ

あっしの間違いでなければ、あのおなごはおかしくなっちゃまった

。

好色女 少女、おやめよ。聞いているのかい？

老女

自分のすべきことをしな！キャベツを切っとくれ！あの子を見るんじゃないよ！ハムレット様、お願いですからもうご自分のところへお戻りなさいまし。わしらのことは放っておいて！

ハムレット

もう行くよ……。 (少女に向かって) ごらん、私は目を開けているよ……。君を見ているよ。(退場)

老女 (少女に向かって) こっちにおいで！

少女 私はオフィーリアよ！

老女 こっちにおいで。(聞) わしらが何をしているか分かるとるか？

少女は踊って口ずさんでいる。

老女

わしらはこんなにあることがあるんじゃないよ！仕事の山じゃ！ばかげたことに付き合つとる暇はないんじゃない！

少女

(かたくなに) 今は私はオフィーリアなのよ……。私はオフィーリア！

老女

いい加減におし。仕事に取り掛かれ！お前はオフィーリアじゃないんじゃない！覚えとけ！もし頭の中に理性がないというんなら……わしがもう手つだっちゃる。(少女を揺り動かしては顔を見て、また揺り動かし、両の頬を続けて叩く)

少女

(首を振り、目を大きく見開く) あなた…… (小さな声で) ……

このくそババア! (頬を押さえる。目を閉じる)

好色女 もうよくなったよ……。もう元通りだ!

少女 (意識を取り戻して、周りを見回し) ハムレット様はどこ?

老女 もう行っちゃまったよ!

少女 オフィーリア様はどこ?

老女 行っちゃまった。

少女

(身じろぎもせず立ち尽くす。しばらくして泣き出す。間。老女に向かって) それで……何をすればいいの?

第三幕 ゴドーを待ちながら

舞台前面に厨房。食堂の大変新しいタイプの厨房。大きな白い鍋、白い家具、壁と一体化した窓。その窓の向こうにはもう一つの舞台。そこには高電圧戦の黒く老朽化した十字が見える黒く閑散とした地平線に広がる眺め。近くには小さな広場があり、中央にぼつんと1本の木が立っている。夜が明ける。厨房では1本のろうそくに火がつき、一時的にビンの中に差し込んである。小さなアルコールランプの調理台にやかんがかけられている。

老女

(テーブルにカップを置く) 朝食だよ。もうコーヒーもできとる

よ!

好色女が手にろうそくを携えて入場。

好色女 (あくびをしながら) 少女はまだいないのかい?

老女 いないよ。

好色女が扉の辺りを通り過ぎがてらスイッチをひねる。老女が肩をすくめる。

好色女

そうだよ、癖でね……。 (窓の方へ近づく) まだ寝ていてもよか

ったのに。まだ夜が明けようとしているところじゃないか……。 (聞) 見たかい……？
全部焼けちゃったよ……。 あそこまで……。 へん……。

老女

そんなのを見ていたいなんて！ さあおいで、コーヒーが入るとるよ。

好色女

火の消えたかまどのように真っ黒だね。(窓を開ける) 臭いよ…
…。昨日言っていたんだ。あっちのほうはもう何もないってね。まだ知らせと明かりがあったときにさ。ああそうだ、犬が死んだんだ！ この鍋も冷蔵庫もみんな役に立たなくなっちゃった。

老女

スープがこれだけ残ったよ。

好色女

きつともう酸っぱくなっちゃっただろ。

老女

惜しいことをしたな。肉だったら叩いて焼いとけばいいがね。そうすりゃ長持ちする。

好色女

だったらなんだって言うんだい。あたしただけで食べられるとでも？ 一日中食べまくったって無理だね。食べるほか何もしなくても。(聞) だったらなんだって言うんだい。それで？ 何を待っているんだ……？

老女

しょっちゅう似たようなことが起こっていたじゃないか……。 思い出してごらん。その後でいつも……。

好色女

おお……。しょっちゅう……！しょっちゅう……！

老女

何か腐るのは好きじゃないね。

好色女

(窓の方へ向かって) なんてこった……。 ごらんよ……。

老女

今度はまたなんじゃ？

好色女

おお……。あの下の方だよ。何か伸びているのが見えるだろ……。 虫みたいに見えるやつ。あそこに……。あそこにまだ……。

老女

ああ、見えるよ。あやつたちはどこに行くんじゃ？

好色女

夜にもああやって歩いてたんだ。月が明るかったから見えただよ。明かりも持たずに歩いてた。上から見ると、何か灰色のものが流れて……洗い流していたように見えただね。それから月が隠れてしまったんだ。それでもまだ歩いてた。あとはもう何も見えなくなっちゃった。ただ聞こえただけだ。ゴキブリが壁をはいずりまわっているのが暗闇でも聞こえるようにね……。

老女 あんなにたくさん……。

好色女

きっとああして避難所から避難所へと歩いていくんだよ……。あのまだ残っているところへ。

沈黙。

老女 (テーブルに戻って) さあ、コーヒーがさめちまうよ。

好色女

(ろうそくの灯を消し、テーブルに着く。飲んで) あの子ももう来てもいい頃なのに。

老女

あの人がまだいるかただ見に行くだけと言って駆けだして行ったきり。まだいないということは、はて悪魔が連れ去ってしまったのじゃろか。もう来てもいいはずなんじゃが。コーヒーのおかわりは？

好色女 ああ、入れておくれよ。

老女 (飲んで食べる) こうして座って待っている……。

好色女

何を言いたかったんだっけ。ああ……、ゴキブリが……。いつだったか野菜売りのばあさんが言ってたが、ゴキブリに一番効く方法があるそうなの。

老女 だいたいここにはいないじゃろうが！

好色女

もしいたらってことだよ。(コーヒーを飲む) 本当の話だって誓って言ったんだ。それでオスとメスの2匹のゴキブリを捕まえて、マッチ箱に入れるんだ。マッチ箱が一番だと言ってたな。なんでも、あのばあさんが自分で試してみたそうなんだ。それを持っていくんだ……。

好色女

(ボタンの鳴る音をまねて)ブブブズズズズ.....、ブズズズズジイイイ.....。

老女 何じゃね？おかしくなっちゃまったのかい！

好色女

いいや。何か忘れてるように思ってね.....。あの大きな明かり.....、あの輝き.....。

老女

あの輝きといたら恐ろしかったね！ひどく大きくて.....。目がつぶれるかと思ったよ。その後は何も無い。停電になって、スープの調理も途中になっちゃまった。

好色女

スープ！世界の半分が焼けちゃまったのに、あんたは「スープの調理が途中になっちゃまった」なんて言うのかい！

老女 それが大事じゃないというのか！

黙ったまましばらくの間座っている。好色女と少女は窓を見ながらコーヒーを飲んでいく。

好色女 彼の名は何て？

少女 デイディ。

好色女 私が思うに、きっと役立たずだね。

少女

いつだったか晩に、一緒に芝の上に座っていたの。ほら、あそこの壁の下よ。孤独だって言ってたわ。それに私だったら口にすることもできそうにないことを言っていたの.....。本に書いてあるようなことよ。本当よ。

好色女 そうかい.....、そうかい.....。

少女

彼は寂しかったの。月が明るく輝いていた。芝の上、私たちのそばに紐の切れ端を置いたわ。

好色女 なんだって？

少女

こうしてその紐を触って、言ったの。「この紐は弦のように引っ張ることができるんだ。首から木の枝まで。そのとき間に合えば、こういう死についてのちょっとした歌をそれで弾くこともできるんだよ。そういうときはあまり時間がないけどね」って。それから、「枝から首まで測るような命なんてよくないな」とも言っていたわ.....。

老女

何か歌った方がいいかね。他にすることがないんじゃないら.....

。

好色女

朝っぱらから？（少女に向かって）.....ということは、やつはなにか寂しいんだな。

少女 時々もう我慢できなくなるって言うの。.....こんなに待つのが。

老女 何か讚美歌はどうじゃ？

好色女 でもどんな？

老女

誰が世話をし給う.....（教会の女たちのようにとてもか細い声で始める）誰が世話をし給う.....

少女

いや！やめて！泣いてしまうわ！私たちみんな泣いてしまうわ。

何か別のにして。

黙って身じろぎもせずに前方を見つめる。

少女 せめて少しでも日が差せば。

好色女 こんな煙の雲.....！あんたたちもこの悪臭感じるかい？

老女

いつだったか大きな騒ぎがあったね。詮索してはいけないと言われた.....。

少女いつだったか.....。

しばらくの間沈黙。

老女

さ、今日を見るんじゃない！誰がみんな詮索すると言うんじゃない？だい

たい誰がそんなことを考えているというんじゃ！（聞）

好色女

本当にこのスープは酸っぱくなっちゃまったのかい？あいつらを誘
ってみたら？（頭で窓のほうを指す）

老女 あやつらと呼ば。窓を開けて呼ぶんじゃ。

少女 そうよ！そうしましょう！

好色女 おーい！そこの殿方！そう、あんたたちだよ！

ディディとゴゴが視線を交わした後近づいてくる。

好色女 中へどうぞ。扉は左手に。

ディディとゴゴが当惑した様子で入ってくる。

老女

どうぞ、おくつろぎを。あのほかのことはみんな気にしないのが
一番ですじゃ。

ゴゴ

ディディもそう言うんです。でも私は気にするんだ。（聞）ご紹介
させてください。こちらがディディ、私の親友です。

挨拶を交わす。

好色女

（少女に向かって。ディディを見ながら）なんてか弱そうなんだ

！

少女 何を知っているというの。この人はとても男らしいのよ。

好色女 スープのだしを3回も取った鶏肉のようだよ！

少女

（ディディのほうへ近づいて、ディディの目を見つめる）ディデ
ィ……、ディディ……。 （好色女を見る）ディディ……、あなたけがしているじゃない
！ああ、私の勇敢なディディ！こんなに自分を危険にさらしたりして！ああなんてこと
！体が血だらけじゃない！

ディディ 何も感じない。（頭をぼりぼり搔く）

少女 ここよ！

ディディ かさぶただろう。

少女 かさぶたですって！あなただけがしているのよ……。見なきゃ！

好色女 (ディディをさすって) 何も見えやしないよ。

少女

あっちへ行ってよ！（まず好色女の方へ。それからディディに向
かって) 私の英雄……。私の小さい……。 (赤十字の棚からガーゼの切れ端を取り出し、
スカーフのようにたたみ、ディディの頭に巻き付ける)

ディディ (ゴゴを見る) ちょっと頭が痛いな……。

ゴゴ 腹が減ったからだろ。ここは食堂？ (周りを見回す)

ディディ きれいな食堂だ。

老女

ああ、きれいな食堂じゃろ。お前さんたちをほぼ毎日見かけるが
、いつも時間がないんじゃ。

好色女 (ゴゴにすり寄って) なんだか怖いんだよ……。

ディディ

どうか怖がらないで。あなたはそんなにも生命にあふれている…

…。

ゴゴ (身振りで示しながら) こんなにもあふれて……。

ディディ

(視線でゴゴをたしなめて) 怖がらないで。たいていこれで過ぎ
去ってしまうんです……。

好色女 なんだって？

ディディ あらゆることが……過ぎ去ってしまうのです……。

好色女

(色っぽく) あんたたちはいつだって何かを待っているじゃない
か！

ゴゴ いつもじゃあない。

ディディ (非難するように) でも私たちは、ゴゴ……。

ゴゴ ああ……。本当だ……。

ディディ そうだろう。お嬢さん方、小さな男の子を見ませんでしたか？

ゴゴ 麦わら帽子をかぶった！

老女 いいや。そうじゃろ、なあ？

好色女 見てないね。

ゴゴ

あの人は約束したんだ。私たちのところへ小さな男の子を迎えにやるって。

老女 お前さんたちのことを聞いた者はおらんよ。

ゴゴ (ディディに向かって) でも約束したよな…… (聞)

老女 何かお食べになるかね？

少女 そうよ、そうよ。座って。ディディ……。

老女

何日もお前さん方を見とるが、食べているところは見とらんかったんじゃ。見とるだけでこっちが疲れちゃうよ。

ゴゴ (ディディに向かって) 疲れてしまうんだってさ。

ディディ

私たちが食べていないことで疲れてしまうのか。あなたなりに良い人のおようですね。

ゴゴ

そうだな。この人なりに。みな自分のやり方があるんだ。あなたもそうでしょう。

好色女 (なまめかしく) それはいろいろな方法があつてよ……。

ゴゴ (控えめに) 私はこう……普通なのがいいな……。

好色女が大声を上げて笑う。しばし困惑するような沈黙。

老女

もしお前さんたちがお腹が空いているというなら……。まだスープが10リットルも残つとるんじゃが。

ゴゴ (敬意をこめて) 10リットルも！一生分だ！

ディディ 私たちはもうほとんど食べないのです。

老女 それじゃあ何のために生きとるのかね！なんてこった！

ディディ 何のスープか聞いてもいいですか？

老女 インゲン豆のスープじゃ。

ディディ 膀胱によくないんじゃないかな？
ゴゴ そんなの知るか。彼女に聞けよ。(老女を指さず)
ディディ 膀胱によくないんじゃないでしょうか？
好色女
(老女に代わって) 風によくないね。とにかく。(自分のカップ
にコーヒーを注ぐ) 殿方たちにもスープを。それでおしまいだ。(ディディに向かって)
) 昔からの知り合いかい？
少女 ディディは詩人なの。
ディディ いや、分からないな……。恥ずかしいよ……。
ゴゴ
だってあんなに上手に歌っていたじゃないか。覚えてるか？(口
ずさむ)
……肉屋は大匙ふりあげた
あわれな犬はこまぎれに⁵
少女 素敵だわ。(口ずさむ)
老女 馬鹿もほどほどにしとくれ！
ゴゴ (怯えた様子で) 静かに……。
顔の表情を変えずに聞き耳を立てる。間。ゴゴが目を閉じ、ほっとした様子で一息つく
。
ゴゴ うまくいったぞ。そうだろう、ディディ？
ディディ (静かに) 分からない……。
ゴゴ
何も聞こえないよ。(間をおいて) やっぱり……逃げたほうがい
いかな？
老女
どこへ？お待ちよ！どこも危険だっていうんなら、どうしてこの
場から動こうとするんじゃ！

ゴゴ (ディディに向かって) どうする?もう?

ディディ 失礼だよ。それにもう私たちは不死身かもしれないじゃないか。

ゴゴ そうやってお前が冗談を言うと悲しくなるよ。

老女

実際のところ、誰もが決して死なないという希望を持っているんじゃないかね。

少女 不死身だって言いたいよね!

ディディ 少なくとも死ぬ体ではないとね。

ゴゴ (老女に向かって) もう長生きされているんで?

ディディがゴゴをこづく。

ゴゴ

あの方がもうだいぶ前からそんなにお若いのかと言いたかったんだ。

老女 お前さん、もうあっちに行っとくれ.....。

ゴゴ あなたは不思議な人だ。そうだろう?

ディディ 人生の盛りの女性のようにね。すぐにスープをもらおうか。

ゴゴ

豊かな胸をお持ちだ。こういう全てが好きだな..... (身振りで示す)

ディディ やめろ!

ゴゴ でも心地いいじゃないか!それに食べ物を頂けるんだ。

老女

(鍋を手に持って。料理人たちに向かって、高揚した気分で) 子どもたち、この肉はどうするかね?今焼いてやるとしようかね?

ディディ ううん.....、焼き肉.....。

老女 (興奮して) 宴を開いてやろうじゃないか!

ゴゴ 結婚式みたいだ!あの人はかっこいいと思わないか?

ディディ どちらにしても大変女性らしい。

ゴゴ

だいたいいろいろな女性がいるんだ.....。こういう人やああいう

人も……。

ディディ 食べ物をくれる女性は中身が美しいのだ……。

好色女

あんたたちは結婚式の話をしているようだが、あたしは今日白い
ニワトコの花の夢を見たよ……。

少女 白い花……それはよくないわ。

老女

わしゃ今日はわたらの父親の夢を見たよ。こんなにご機嫌でな。
牛乳がゆがないかと聞いたんじゃ。朝だったからな。あの人はいつも朝うまいスープを
飲むのが好きだったんじゃ……。

ゴゴ

(ディディに向かって小声で) 好きだった……。おい、あの人に
思い出させろよ……。

ディディ 私たちもスープが好きなんです！

老女

おお！何日も歩き回って何も食べとらんで、それでよかったんじ
ゃろ。なのに今度は催促かい！あなたはいつまでもお若いですね、じゃと？胸がこーん
なですね、じゃと！ほかに何を言い出すかと思えば！スープが好きじゃと！

好色女 静かに！……あれは……。

全員聞き耳を立てる。

ディディ 足音だ……。

少女がディディに寄り添う。

ディディ 男の子か？ゴゴ、あの男の子かもしれんぞ……。

少女 ディディ……、何か言って……、ディディ……。

ディディ だから言っているだろう。男の子だ……。

少女

そうじゃなくて、私に言って……。だから……。私のことまだ好
き？

窓を見ながらディディが少女に口づける。

好色女 おお、ごらんよ！ごらんよ！

窓の向こうにポッツォとラッキーが出て来る。ラッキーは重いかごを引きずっている。
ポッツォは綱でラッキーを導いて来る。

ディディ ポッツォだ。
ゴゴ ポッツォ。大変尊敬すべき市民だ！
老女 なぜあやつらはここに来たんじゃ？
ゴゴ

（老女に向かって）いつだったか私たちは彼がゴドーだと思って
いたんです。ディディ、覚えているか？

老女 誰だって？
ディディ ゴドーです。あの、白髭の。我々が待っている人です。
老女 ゴドーだって？
ゴゴ 男の子を私たちのところへ向かわせているはずの人です。
ディディ 長く白い髭があるということだ。
好色女 静かに！あの人が何か言ってるよ！
ポッツォ

こちらに少し水はないですかい？喉が渴いて死にそうなんです。
森に迷い込んで、道が分からなくなってしまったんです。幸運なことに、こやつには（
ラッキーを指して）犬のような嗅覚がありましてな。

老女 お腹は空いていないですかい。インゲン豆のスープがあるんじゃ
が。すぐに肉も焼けるんで。

ポッツォ いやいや、遅れるといかんのでね。水だけくだされば。
好色女 どこに遅れるって？
ポッツォ

川底の下にある大きな避難所で死んだほうがいいって言われたん
だ。恐らくもう最期の時なのでね。

ゴゴ 本当だ。死ぬのに間に合わないかもしれない……。
ディディ 肉はそんなに小さくないぞ、ゴゴ。
好色女 さあ、水ですよ。
少女 これは荷物持ちさんに……。

ラッキーが口ごもる。

ポッツォ

いや、これは必要ない。あげてもよいが、すぐにまた喉が渴くん
でな。実はもう飲まないことには慣れさせてあるのだ。

好色女

それはあんた、稀に見るお人だね、本当に！それに美しいお人だ

……。

ポッツォ

私には時間と秩序の感覚があるんでね。（好色女を見て）それを
評価する女性は少ないのだが。（ラッキーを指さして）それにこやつは生まれた時から
口がきけないのだ。

間。視線と微笑み。

好色女 やっぱり寄っていきませんか……少しでも。扉は左なんで……。

ポッツォとラッキーが入ってくる。

好色女

（ポッツォに向かって）面白い！こんなに力強い男を見ると、い
つもはもっと怖いもんだが……。それともあなたはまさに……。

ポッツォ

もう何も変えることはできないという、なだめるような感覚がお
前さんに働いているのと違いますか？

好色女 （うっとり見つめて）あたしは恐怖に弱いんです……。

ポッツォ

（好色女を見て）もう少し時間があつたらな。（時計に目をやっ
て）喜んであなたと結婚するのだが。

ゴゴ

まだ間に合うかもしれませんよ。

ポッツォ

女性……、素晴らしい体つき……、豊満な……、力強い……。あ
なたをこいつと一緒に引き連れて……、裸にさせて、綱でつないで……、その大きなお
尻をたたいたら……。

好色女 （ポッツォに倒れこんで）そう……、そうよ……。

老女

(テーブルに皿を並べ、スープを入れる) もうそのくらいにして、食べに来なされ！みんなじゃ！

好色女

こんなにいいところなのに！待って！それであなた、あたしに聞くの？あたしに妻になって欲しいの？

ポツォ 喜んで結婚しますよ。本当に。でも手遅れだ。

好色女

手遅れなんてことは決してないね！あたしの大切な人！やろうと思えば何でもできるの！ああ神様、もうずっと前からこんな男性を待っていました！ずっとずっと……。いつも待っていました！

ディディ だいたいそいつはゴドーじゃない！

好色女

ゴドーが何さ！この人は本物の男だよ！夫なんだ！夫！世界が壊れてもいい。結婚するんだ！全てなくなってしまうてもいい！灰になっても、廃墟になっても！結婚するんだ！爆弾もミサイルも水素も、ほかになんだっていうんだ。結婚するんだよ！！！！

ポツォ

だが誰かが式を執り行ってくれなきゃならんね。届を出さなけりや。

ゴゴ

もうすべてが終わってしまうんだったら、そうする意味があるかな？

ポツォ 秩序はあるべきだ。秩序がないならしたくない。

好色女 (ゴゴに向かって。怒って) ごらんよ！全てが終わる！

老女

だいたいいつだって人間ってのがそういうもんじゃろ。間に合いさえすれば……。片方の足が墓に入っているというのにもう一方の足は式台にあるんじゃない！何も目新しいことじゃない……。それで、行きなされるのかね？

好色女

まずは結婚式だ。そうだろ、あんた？（ポッツォに寄り添う）
らん……、ここに……。

ポッツォ 太っちょさん……、好きなんだ。でも秩序はあるべきだ！

好色女

ああ……、本当だよ。（間）それとベールもあるべきだよ！ベールなしの結婚式なんて！

老女

今さらベールなんてどこから。食べるものがあるだけでもましな
くらいじゃ！

少女

（ディディの周りを踊りながら）ベール……、ベール……。ベール
がなくっちゃ……。

ディディ 君にベールは似合うだろうな……。

少女

（立ち上がる。夢見るように）そうね……。白く透き通ったベール……
地面まで届くような……。式台はろうそくでいっぱい……。40本ものろうそく
……。花嫁介添人……。金の結婚指輪……。私の耳元であなたは愛をささやくの……。
オレンジの木……。黒いリムジン……。きらきら光って……。あなたは私の手を取って…
…、愛の言葉を言うの……。愛の言葉を言うの……。何度も。

好色女 それでそのベールはどうするんだい？

少女

（ディディの包帯がまかれた額を見る）おお！ベールがあるわ！
見て！（ガーゼの包みを取りに駆けて行き、ほどく）

好色女 （ベールをかぶって）おお……。

少女がベールをかぶせる。

好色女 ……花嫁……。

少女

ベール……。 （好色女の周りをダンスのステップで数歩歩く） …
…花、花……。 （自分の頭にもガーゼの切れ端を投げる）

ディディ 素敵だ…… （少女にキスする）

少女 ……言って……。

ディディ ……私たちもそうするか……？

少女 夫……、妻……。あなたは私に愛の言葉を言うの……。

ディディが少女にキスする。

ゴゴ 静かに！！！！……聞こえるか？……。

全員が聞き耳を立て、身じろぎもせずにいる。しばしの緊張と期待。

ポツォ 早く……、早く！もうあまり時間がない！

老女 おっしゃるとおりじゃ！早くせい、みんな冷めちまう！

ポツォ

誰が結婚式を執り行ってくれるんだ？こういう場合は誰でも権利が許されるんじゃないか。お役人だけじゃなくても！

好色女と少女が大変厳粛な顔つきでベールをかぶり隣同士立っている。ほとんど悲劇的に見える。

ディディ たぶん君が、ゴゴ……。

ゴゴ たぶん私だ、ディディも式を挙げるんだったら……。

ポツォ

早く！……早くするんだ！避難所に間に合わねば！あそこでは…

…。

ゴゴ (泣きそうになりながら) 十字架だ！十字架はどこだ！

老女 (右手の扉を指さして) あそこの部屋に……。

好色女が泣いている。

ポツォ 静かに！落ち着いて！窓の方を見るな！私に続け！

ゴゴ

(怯えた様子で) 神よ、われらにご慈悲を！神よ、われらを憐み給え！もし本当におられるなら、神よ、憐み給え。憐み給え！（ひざまづく）

ポツォ

たくさんだ！もうたくさんだ！もう行こう！時間がもったいない

！

ゴゴを連れて部屋から出ていく。

老女は後に残り、大鍋の中をのぞいている。蓋を直すと彼らの後を追って駆けだしては

戻り、再び走り出す。静かな音楽が聞こえる。結婚行進曲。しばらくして新郎新婦が帰ってくる。ゴゴが後に続く。全員真面目な顔で固まっている。

老女

召し上がってくれ！召し上がってくれ！そういう習慣じゃ！めでたい！

ゴゴ

(老女に向かって) 静かに！静かに！なんてたって、恐ろしかったんだ……。あんなことではいけない！

好色女 おお……。 (指を上突き出す)

全員が期待で凍り付いたように固まっている。小さな男の子が麦わら帽子をかぶって窓の向こうに現れる。奇妙だ。大変青白い。誰かを探すように窓の方をのぞく。

ディディ 見ろ！あの男の子だ！私たちのところに来たんだ！

ゴゴ いつもと同じ子だ！

ディディ (小さな男の子に向かって) ゴドーさんが君を遣わせたのか？

小さな男の子 はい、そうです。

ディディ ここにいらっしゃるのか？

小さい男の子 いいえ、いらっしゃいません。

ゴゴ それじゃあ何か？何か伝言を言付かったのか？

小さな男の子 あなた方をお待ちしているということです。

ディディ なんてことだ！いつ？

ゴゴ どこで？早く言え！

小さな男の子 急ぐようおっしゃっていました。大きな避難所で待つと。

ディディ 川底の下の？

小さな男の子 そうです。ぼく、もう行かなきゃ。遅れないように！

ディディ

ちょっと待ってくれ。どうやってゴドーさんだって分かるんだ？いつも長く白い髭をはやしているのか？

小さな男の子

(走りながら振り返って) はい、そうです！頭にヘルメットもかぶっています！

ディディ (ゴゴを見て) ……ヘルメットだって？
小さな男の子 (駆けて行きながら) 急ぐようおっしゃっていました！
ゴゴ (ディディに向かって) 急ごう！早く！
ディディ (少女を指さして) 彼女は？
少女 あなたと一緒にいくわ！
ポツォ 一緒に！一緒に！ラッキー、こっちへ来い！妻よ！行こう！

次第に強く耳をつんざくような恐ろしい響きの結婚行進曲が響き渡る。二組の新郎新婦、ゴゴとラッキーは駆け出して行く。壁と一体化した窓から、足を高く上げて走っていくのが見える(ほとんど踊るように。死の踊りをほのめかす)。ボールが風になびいている。突然ラッキーが立ち止まる。全員ラッキーの後ろを見ながら立ち止まる。

ラッキー

(力強い身振り手振りで) 「前提としてポアンソンとワットマンの最近の土木工事によって提起された白い髭の人格的かかかか神のかかと空間の外における存在を認めるならばその神的無感覚その神的無恐怖その神的失語症の高みからやがてわかるであろうがなぜかわからぬ多少の例外を除いてまさにわれわれを愛し神的ミランダのごとくやがてわかるであろうがなぜかわからぬ苦しみの中に火の中にある人々とともに苦悩しそして……」⁶

次第に力強く行進曲が響き渡り、ラッキーの言葉をかき消していく。窓からは老女が手を振っている。音楽が轟き、耳をつんざき……周りの音をかき消す。突然強大で恐ろしげな、眼をくらますような明るい光が全てを包んでいく。明かりが消える。暗闇。静けさ。

ゆっくりと舞台が明るくなっていく。からっぽ。何もない地平線。前方の舞台には灰の山。瓦礫からゆっくりと老女が起き上がる。一人ぼっちで立っている。間。

老女 神よ、われらを憐み給え！(手を頭のほうへ上げる)

辺りを見回す……。突然かまどがあった方へと振り返る。瓦礫の下から肉の乗ったフライパンを引っ張り出す。無意味な安堵。

老女 焦げなかったよ……。 (肉を見て、振り返る)

壁の残りの向こうから、類人猿のような、「向こうの世界からやって来た」生物のような、おかしな人影が現れる。厨房の内部を除きながらふらつく。老女がゆっくりとゆっくりと振り向く……。肩越しに見る。恐怖。驚き。逃げようとするが立ち止まったまま。あちらの生物の方へ顔を向ける。長い間お互いの顔を見合わせ立っている。何をすべきか迷っているかのように、訪問者の方へ何か身振りで示したいかのように、老女はずっとフライパンの柄を握っている。

幕

ノラ・シュチェパンスカ、『女料理人』（『ダイアログ誌』1961年、第1号）戯曲はウッチとパリで1959～1960年に完成。

初演：クラクフ国立高等演劇学校、1964年5月28日、監督 イェジィ・ヤロツキ

ラジオ初演：ポーランドラジオ劇場、1961年9月29日、監督 ズビグニェフ・コパルコ

テレビ初演：テレビ劇場、1981年3月30日、監督 マルツェル・コハンチク

クリスティナ・ウニエホフスカ krystyna uniechowska

レコード Płyty

人物

彼女

アンテク

(明るい部屋の片隅。柔らかで暖かい。彼女とアンテク)

彼女 いや、いや。そんなふうにすぐキスしないで。駆け込み乗車
みたいにしないでよ。何急いでるのよ。

アンテク ぼくは遅刻のタダ乗り野郎さ。どうしてもっと早く来させて
くれなかったんだ。朝から何してたんだよ。

彼女 朝から？朝ねえ。夜明けなんてあった？ずっと暗くて暗くて、
あげくにもう灯りをつけたわ。ねえ、この灯り気に入った？

アンテク おい、答えろよ、僕が来るまで何してたんだ。夜から、聞いて
いいならその前の晩から、去年の冬から、ずっとさ？

彼女 蓄音機を用意してレコードかけてたのよ。すてきな録音持っ
てるの。最新のも古いのも。中にはめったにないのもあるのよ。ね、
聞いて。(蓄音機をセットする)

アンテク これなに？

彼女 これは戦争のグランドコンサートの一部よ。わたし、この前

の戦争の録音、全部持ってるの。レコードたくさん。コロンビア社のレコード、いっぱい。そう、アメリカの会社のね。「メロディ」社の方はたくさんおもしろいメロディを録音してるのよ。例えば、今聞いているこれなんか、アフリカ戦線の最終編。トブルクの戦いよ。ほら、撃ち抜かれた喉で、砂と血がきしんでる。今度は砲撃された巡洋艦が沈没していく。レーダーが死の潜水艦に閉じ込められて甲高く鳴り響いてる。魚雷が迫って来るわ。あ、このすごく小さな音、ずっと続いているモチーフ、これは人間のこめかみが脈打つ音なのよ。

アンテク もうやめろよ。聞いてられない。きみにキスしに来たんだ。蓄音機回しに来たんじゃない。せめてアダプターならな。で、まともなレコードなら。

彼女 音が何もしない中でキスなんかできないわ。隣が何かと聞き耳立ててるのよ。ここの壁は薄いし、ラジオは修理に出してるし。あなた、このレコードが気に入らないの？たしかに単純なメロディじゃないけど、でも音楽の才能があれば口笛吹いたり、歌えないことはないはずよ。一番難しいのは、埋もれた地下から聞こえてくる息が詰まった響きね。ドレスデン、ワルシャワ、ロンドン、キエフの地下。いつも同じ三拍子のメロディよ。まず、破裂音、滝のような雑音、それからよくわからない言葉とうめき。わたし、これを歌って、砕け散る天井と肋骨のうめきのフレーズのところまで来ると、声が崩れちゃうの。もう歌手なんてとんでもない、わたしって音痴もいいとこね。でも、そうなの、ただただこの音楽に惹かれるのよ、子供時代のジャムがいっぱい詰まったパントリーみたいなね。(レコードをジャケットに入れ、また他のレコードを出しては見る)

アンテク ああ、なんて明るくてふんわりした髪なんだ。おいでよ、もっこつちに。

彼女 待って。何かレコードかけなきゃ。さっき言ったでしょ。ベッドがきしむのよ。

(蓄音機が「鳴り」出す)

アンテク おい、いい加減にしてくれ。なんだよ、また。

彼女 『叫び』よ、これ、私のお気に入りなの。そう、人間の叫び声の録音よ。あちこちそこらじゅうで叫んでるの。叫び始めはあちら側なんだけど、わたしは真ん中にするのが好きなのよ。このメロディ、あんまりしょっちゅう聴いてるから、一番劇的な叫びのところが傷ついちゃって。針が溝を先に進まなくなったの。ここに来ると土を掘るモグラみたいにほじくりたくなるわ。で、指で押すしかないの。こんなふうに聞こえるのよ、大きく純粹な叫び声って。

アンテク ああ、頼む、気が狂っちまうよ。もう蓄音機閉じろ。棚にしまってくれ。レコードもだ。きみ、なんてあったかい手をしてるんだ。なんで、こんな手で冷たいエボナイトレコードを触って、拷問されてるかもしれない人の叫び声を。(だんだん声が大きくなる) あああ、いい加減にしろ！手で拍子取るなよ。拍子なんてないじゃないか！メロディもない！やめろ、やめろ！

彼女 (蓄音機を止める) なんてくだらないの、あなたって。音楽わかってないし。声が掠れて打ち砕かれるいちばんきれいなところで、がなったりして。あのものがきと高音から始まる崩壊、わたしいつも一番惹かれるのよ。その瞬間、必ず感激するの。叫びがもう力尽きたところにこそ人間の奥底の何かがあるのよ。そこで振動板に耳を近づけるとね、数歩先じゃ聴こえなかった音が聞こえるの。最後の2周、針が軋む、でもそのどこかに叫んでた人の最後の吐息がまだあるの。まるでほっとしたみたいに。それで、わたしはこんなに美しいって感じるんだわ。

(二人とも沈黙、彼女はレコードを手にして回し、置く)

アンテク 寒い。

彼女 ヒーターは効いてるわよ。窓はちゃんと閉まってるし。裏庭のこんな高いとこの窓、鳩だってめったに来ないわ。こんなに静かだと、あんたと何しゃべったらいいか、わかんないわ。ねえ、気がついた、わたしの新しいワンピース？

アンテク あ、かわいいね、古着屋ででも買ったの？

彼女 いや、しわくちゃにしないで。もう、ほんとに。触らないでよ。静かすぎるわ。わかって、ねえ、アンテク、棚に一枚怖いレコードがしまっているの。白いフォックステリアがホーン付き蓄音機を聞いているラベルの、イギリスの古い会社のでね、それに録音されているのは死なのよ。そのレコードには音がないの。黒い円盤が沈黙の中、ただ回るのよ。ちょっとスプリングが軋むけど、でもスピーカーの振動版は音を出さない。音のない動き。だから、こんなふうに私の部屋が静かだと、まるであのレコードがかかっているように感じるのよ。

アンテク もう、レコード全部割ってやる。あー、悲惨。おまけにとんでもなく金かかってんだろ。外国製だもんな。

彼女 当たり、高いわよ。何にも代えられないわ。どうせわかんないわよ、あんたには。値段は奇妙でよく変わるの。時には鏡の一瞥だったり、目の下のシワ、頭の白髪みたい。一番おいしいケーキの後味の悪さ。クロッシュメルルのスキャンダル映画の後のもの悲しさ、白い雪と青い空の呪い。照りつける暑い日の砂浜にうつ伏せに寝て、突然黒い太陽が目に飛び込んで....。

アンテク そんなくそばかばかしいことにこれだけのレコードかい？カラフルなラベル、踊る楽譜にスター歌手の似顔絵のついたジャケット。幼稚だ。あ、これなに、－いいじゃないか、「コロンビア・シンフォニック」、曲名は愛。

彼女 置いてよ、それ、もう。触らないで。

アンテク どうして？ぼく、これかけたんだよ。だいたい、このために君のここに来たんだ。

彼女 それ聞くのは、一人でいる時だけなのよ。

アンテク もうふざけんのやめろよ。やっと歌らしきレコード見つけたんだ。

彼女 ばかね、「これ」が歌ってるとでも思ってるの？

アンテク がなっちゃあいがないよ。

彼女 いやなの、手離して。(アンテクからレコードをもぎ取る) 約束するわ、かけるって。でも今はまだダメ。時間はあるわ。これは廊下の最後の扉みたいなもの！入らないで、地下牢みたいなものなのよ、お願い、アンテク。もう出てこられないわよ、抜けられないの、戻って来れられなくなるわ。

(揉み合いが続く)

アンテク きみ一人の時なら、どこだろうが入ればいいさ！ぼくはそこで何が起こってるのか聞かなきゃならないんだ。どんな拍子で、どんな音楽の、君にとってどんな響きのフレーズなのか。どうしても聞くんだよ。聞くんだ。

(レコードが二人の手から落ち、粉々に割れる。暗転。しばらくして、再び同じ部屋)

アンテク もう大丈夫だ。

彼女 もちろん....！

アンテク レコードなしでいけた。

彼女 もちろん。

アンテク また来たら、こういうの、友達からもらってくるよ。踊れるやつを。

彼女 でも、この割れた分、払わなきゃ、だってこれも借りてたんだもの。

アンテク 金ないの、わかってるだろ。

彼女 わたしは払わないわよ。

アンテク じゃ、なに心配してんだ。

彼女 心配よ。結構高くて短期だったのよ。てか、すごく高かった。

アンテク 悪賢いんだから、なんか思いつくだろ。代わりにお前のコレクションから何か一枚やるとか。いいかげんこんなの全部処分しろよ。

彼女 あなたももうこのレコードの音楽聞いたでしょ。こういう旋律ってしつこくて、忘れられないものよ。あなたも市電の中や映画館に並ぶ行列で、口笛吹くことになるんだわ。(壁の向こうから、玄関の呼び鈴のようなけたたましい音。彼女は大きな苦悶に襲われ、すくと立ち上がる)

彼女 ああ、きつとこのレコードだわ。今に入ってくる。なんてついてないの！早く、取り立てられる前に、なんでもいいから早く払わなきゃ。

(彼女が窓から飛び降りる。アンテクが窓を閉じる。手に息を吹きかける)

アンテク 寒い....寒い....寒い....。(蓄音機を用意し、彼女が一番好きだっ

たレコードをセットする。均一で澄んだおぞましい叫び声) ああ、よ
かった、自分じゃなくて。ま、聞くだけで十分。

クリスティナ・ウニエホフスカ (Krystyna Uniechowska) 著、
「レコード (Płyty)」、『Dialog』誌 1957 年第 4 号初出、ポーランドラジオ劇場
1958 年 3 月 10 日ラジオ初演、演出ズビグニェフ・コパルコ (Zbigniew Kopalko)

戯曲は「女性であること。戯曲集（Rodzaju żeńskiego. Antologia dramatu）」からの出典。編：アガタ・ハウウプニク（Agata Chałupnik）、アガタ・ウウクシャ（Agata Łuksza）、選：アガタ・アダミエツカ＝シテク（Agata Adamiecka-Sitek）、アガタ・ハウウプニク（Agata Chałupnik）、クリスティナ・ドウニェツ（Krystyna Duniec）、エヴェリナ・ゴドレフスカ＝ビリニャク（Ewelina Godlewska-Byliniak）、ヤゴダ・ヘルニク＝スパリンスカ（Jagoda Hernik-Spalińska）、ヨアンナ・クラコフスカ（Joanna Krakowska）、カタジナ・クワコフスカ（Katarzyna Kułakowska）、ユスティナ・リプコ＝コニエチュナ（Justyna Lipko-Konieczna）、アガタ・ウウクシャ（Agata Łuksza）、モニカ・ジユウコシ（Monika Żółkoś）

出版：ズビグニェフ・ラシェフスキ記念ワルシャワ演劇研究所、2018年

本書はフェミニズム研究プロジェクト「HyPaTia. Historia Polskiego Teatru（HyPaTia — ポーランド演劇史）」の一環として、全国人文学発展プログラムの助成を受けて出版されたものです。 [11 H 12 0379 81]

wiepodlega

ポーランド
独立100周年

CULTURA
JOHN HICKELWICZ
INSTITUTE

Ministry of
Culture
and National
Heritage of
the Republic
of Poland

1994-2019
manggha

UNIVERSITAS
MAGNIFICENTIAE

INSTYTUT KULTURY POLSKIEJ

CEMiPoS

benetka
mocos

TVP
KULTURA

Radio Gdańsk

TORI

Japonia
Online